

令和7年度  
自己点検評価書

令和7(2024)年5月  
桜花学園大学

## 目 次

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| I. 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等 | 1  |
| II. 沿革と現況                        | 5  |
| III. 評価単位ごとの自己評価                 | 9  |
| 教育保育学部                           | 9  |
| 教育保育学科                           | 11 |
| 国際教養こども学科                        | 15 |
| 国際学部・学芸学部                        | 19 |
| 国際学科・英語学科                        | 21 |
| 大学院人間文化研究科                       | 24 |
| 教育・保育職支援センター                     | 25 |
| 地域連携センター                         | 27 |
| チャイルドエデュケア研究所                    | 28 |
| 観光総合研究所                          | 31 |
| 国際交流支援センター                       | 33 |
| 情報総合センター                         | 36 |
| 教務委員会                            | 38 |
| FD 委員会                           | 42 |
| 学生委員会                            | 44 |
| 入試委員会                            | 48 |
| 事務局                              | 50 |
| IV. あとがき                         | 52 |

## I. 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等

### 1. 桜花学園大学の建学の精神

桜花学園の「建学の精神」は「心豊かで、気品に富み、洗練された近代女性の育成」とされ、「学校法人桜花学園 寄附行為」において、「この法人は、教育基本法及び学校教育法並びに私立学校法に従い、宗教精神によって学校教育を行い、信念ある女性を育成することを目的とする。」と規定している。

本学は、学園の「建学の精神」「設置の目的」を実現するために学園の高等教育部門において学士課程及び大学院修士課程教育を担う大学として設置された大学である。

入学式や学位記授与式では、学長告辞や理事長祝辞において、学園の歴史とともに、学園創立者 大溪 専（おおたに もはら）氏の学園の設置の目的及び「建学の精神」が述べられ、今日まで継承している。

### 2. 桜花学園大学が目指す大学像

#### (1) 桜花学園大学の基本理念、使命、目的

本学の学則第1条には、次のようにその目的を明記している。

- 1 桜花学園大学（以下「本学」という。）は、教育基本法、学校教育法及び建学の精神に基づき、信念のある人を育成することを教育理念として、広く知識を授け、高い教養と専門的能力、豊かな人間性をかねそなえた優れた人材を育成するとともに、教育保育学部にあつては教育学・保育学にかかわる学芸、国際学部にあつては国際社会における人文・社会科学の諸分野にかかわる学芸を教授研究し、深く真理を探究して新たな知見を創造し、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与することを目的とする。
- 2 本学の設置する各学科における人材の養成に関する目的、その他の教育研究の目的は次の各号に定める通りとする。
  - (1) 教育保育学部教育保育学科は、豊かな教養と社会人としての基礎的能力、専門職としての豊かな専門的知識・技能、自己開発能力を有し、人類の福祉と子どもの最善の利益に貢献しうる高度の専門性を具えた有為な教育保育専門職の養成を目的とする。
  - (2) 教育保育学部国際教養こども学科は、社会のグローバル化に対応した豊かな教養と基礎的能力を有し、グローバルな視点に立って幼児期の教育保育を担い、人類の福祉と子どもの最善の利益に貢献しうる高度の専門性を具えた有為な教育保育専門職の養成を目的とする。
  - (3) 学芸学部英語学科は、幅広い教養と論理的・創造的な思考力及びグローバル化した社会における実践的な英語コミュニケーション能力を有し、社会の各分野で貢献しうる有為な人材の養成を目的とする。
  - (4) 国際学部国際学科は、地域・国際社会に関する幅広い知識と語学力を生かしたコミュニケーション能力および多岐にわたるグローバルな問題を解決するための論理的・創造的な思考力と主体的・実践的な対応能力を有し、社会の各分野で貢献

しうる有為な人材の養成を目的とする。

## (2) 教育保育学部の基本理念

教育保育学部は、教育学・保育学の体系的な教育と研究、時代の要請に応えうる高度の専門性を具えた有為な教育・保育専門職養成を行う全国ではじめて学部名称に「保育学」を冠する学部として設置された学部である。平成30（2018）年4月には、国際教養こども学科を設置した。令和7（2025）年度から保育学部を教育保育学部、保育学科を教育保育学科に名称変更した。教育保育学部の基本理念は、大学の学則第1条2を踏まえ、「参加・共同・創造」としており【3つの目標と9つの課題】として育成指標を「履修の手引き」に示している。

（教育保育学部の基本理念）

教育・保育学に関する体系的な教育・研究を通して、学生の社会参加と自己実現を支援し、もって人類の福祉と子どもの最善の利益に貢献しうる高度の専門性を具えた有為な職業人を養成するとともに、社会の要請に応えつつ教育・保育の社会的な発展に貢献する。

### 【3つの目標と9つの課題】

- I 男女共同参画社会の実現という現代社会の課題に応え、学生の自己実現を支援し、能動的で自己開発的な学習主体として社会参加の意識と高い能力を持った学生を形成する。【参加】
  - a. 授業への積極的な参加を促し、自主的・主体的で、自己開発的な学習主体として学生を形成する。
  - b. 学部の責任ある構成員として学部づくり活動への積極的な参加を促し、その行動と経験を通して社会参加の意識と能力を醸成する。
  - c. ボランティア活動、実習、インターンシップ、演習、サークル・委員会活動等の授業および授業外の社会参加・体験学習の豊かな機会を保障し、責任ある社会の構成員としての意識と能力を醸成する。
- II 個人としての責任感と同時に共同の責任感をもって、問題解決と課題実現のために豊かな研究と活動を共同で展開しうる意識と能力をもった学生を形成する。【共同】
  - a. サークル・委員会活動等学生の自主的諸活動を積極的に促進し、相互に協力して問題解決と課題実現のために活動する機会を豊かに実現する。
  - b. ゼミ等の活動を通して、学生が個人としてまた相互に協力し、かつ学生と教員とが目標を共有して、特定のテーマについて研究し、様々な課題に則して活動する経験を豊かに保障する。
  - c. 社会参加の多面的な機会を通して、責任ある活動のために組織されている団体との協力関係を体験的に学び、そのような協力関係を取り結ぶ責任ある社会の構成員としての意識や能力を醸成する。
- III 子どもの発達保障や子どもの最善の利益を実現しうる社会の形成等の責任ある社会的活動に従事しうる能力を育成し、想像力と創造力を豊かにもった学生を形成する。【創造】
  - a. 時代の要請に応え教育・保育学の体系として構造化された保育学部の教育

課程を系統的に学ぶことを通して、学問的な深みと広がり育成、想像力を豊かに涵養し、教育・保育学の創造的な学習主体としての学生の自己確立を支援する。

- b. 学生にとって学習と生活の基盤であり環境である保育学部を『私の大学』としてのアイデンティティを持ちうるように、学生一人ひとりが責任ある構成員としての意識をもって学部を創造する活動を積極的に展開し体験する。
- c. 社会参加の多面的な機会を通して、教育・保育や子育て支援等の仕事や活動において求められる課題を理解し解決するために必要な想像力と創造力を体験的に学び、専門職としての創造的な力量を豊かに形成する。

### (3) 学芸学部の基本理念

学芸学部は、英語学科のみを置く学部として平成21（2009）年4月に開設された。その理念は、「学芸学部英語学科：設置の趣旨及び設置を必要とする理由」において次のように明確に記載している。

英語学科では「幅広い教養と論理的・創造的な思考力」及び「グローバル化した社会における実践的な英語コミュニケーション能力」を持った人材を育成するために、グローバルな視点から言語理解・異文化理解・英語コミュニケーションを含む人間文化研究に関わる教育活動を指向する。特に英語コミュニケーション力育成に関しては、入学時からの導入教育を含めて多くの授業を英語で実施する英語集中プログラムを導入して国際通用性のある英語力を育成し、クリティカル・シンキング（批判的思考）の考え方を取り入れた教育を実施して、学生の論理的思考力や表現力、さらには創造力を育成し、国際社会で活躍できるコミュニケーション能力を持った人材の育成を目指す。具体的には、大部分の学生の英語力が卒業時には TOEIC®で 800 点以上のレベルに達することを目指す。また、教育の中に ICT 技術を多面的に取り込み、学生の ICT 技術を活用した情報発信の能力やグローバル・コミュニケーション能力の獲得を目指す。

学芸学部は、中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」で提言されている「幅広い職業人の育成」と「総合的教養教育」をその重点的機能とする学部であり、リメディアル教育を重視した幅広い教養教育を教授する学部としての特色を持っている。また、グローバル化がますます進む今日において国際通用性のある英語力の育成を目指し、次のような特色ある教育を展開している。

- ① 演習科目である英語科目のみならず講義科目にも英語による教育を積極的に取り入れて、実践的で真に国際通用性のある英語力を育成する。
- ② 学生にクリティカル・シンキング（批判的思考）の考え方を演習科目や講義科目で常に意識させることにより、国際社会で通用する物事の考え方や表現方法を習得させ、異文化への深い理解、豊かな教養を身につけた国際人として成長

するように、教育課程や科目の内容を充実させる。

- ③ ICT技術を積極的に導入した授業方法を実施する。
- ④ 英語演習科目やICT関連科目を含めて徹底した授業管理システム（Ohka Moodle）を導入し、学生の学習進度にあったプログラムを編成し、学習者全員が到達目標に達することを目指す。
- ⑤ 情報リテラシーを含めた総合的な教養教育を重視し、現代の時代に対応できる自立した職業人の育成を目指す。

#### (4) 国際学部の基本理念

国際学部は、国際学科のみを置く学部として令和6（2024）年4月に学芸学部を改組して開設された。その理念は、「国際学部国際学科：設置の趣旨及び設置を必要とする理由」において次のように明確に記載している。

桜花学園大学は平成10（1998）年度に人文学部を開設し、平成15（2003）年度には人間関係学科、国際文化学科、観光文化学科の3学科を置いて教育研究を行ってきた。その後平成21（2009）年度に学芸学部英語学科1学科に改組変換し、現在に至っている。令和6（2024）年に開設した本学部は国際学科1学科（入学定員50名）を置く。本学部は、既存の学芸学部の教育課程、教員組織を基盤として、それを発展的に改組するものであり、本学部の設置届出と同時に学芸学部は学生募集を停止した。

学校法人桜花学園は「心豊かで、気品に富み、洗練された近代女性（人）の育成」を建学の精神とし、常に時代に先駆け、社会の要請に応える近代人の育成に取り組んできた。桜花学園大学は、その学則第1条で「教育基本法、学校教育法及び建学の精神に基づき、信念のある人を育成することを教育理念として、広く知識を授け、高い教養と専門的能力、豊かな人間性を兼ね備えた優れた人材を育成するとともに、保育学部にあつては教育学・保育学にかかわる学芸、国際学部にあつては国際社会における人文・社会科学の諸分野にかかわる学芸を教授研究し、深く真理を探究して新たな知見を創造し、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与することを目的としている。このように、本学では学園の建学の精神・教育理念を踏まえ、信念ある近代人を大学の人材育成の基本目的として、時代と社会・地域の要請に応え、世の中に貢献できる人材を育成してきた。昨今の地球規模でのグローバル化の中で、個々の価値観や言語、文化的背景の多様化は社会において必須のものとなり、我が国においてはあらゆる側面から更なる対応が求められる状況にある。教育においてもそれらに対応するべく、学生の国際性、多様性、主体性を育むと同時に体験的理解や実践的な力量を涵養するための様々な教育課程の改変が求められている。特に本学が所在する東海地域は国内でも有数の外国籍住民の居住率の高い地域として多文化共生の取組を推進している。このように、様々な課題・要請が顕在化する地域社会の国際化に対応するべく、本学部の設置に至ったものである。

#### (5) 大学院研究科の基本理念

大学院研究科は、次のように理念を明示している。

人間文化研究科では、信念のある人の育成という教育理念に基づき、複雑・多様で不透明な現代社会を切り開くための知性と理性を兼ね備えた創造力、豊かな高度職業人の養成を目指す。

- (1) 人間科学専攻では、学部での学び、現場での実践経験をもとに、教育・保育学、心理学における高度な専門性を有する教育者・保育者の育成、実践的研究能力の向上をはかる意欲のある人材の育成をはかる。
- (2) 地域文化専攻では、高度な語学能力や幅広い教養を修得することによって、世界的視野で地域課題にアプローチし、多文化共生社会の創造へ向けて取り組む意欲のある人材の育成をはかる。

## Ⅱ. 沿革と現況

### 1. 本学の沿革

桜花学園の歴史は、明治36（1903）年の「桜花義会看病婦学校」の開設をもって始まる。以来、百二十余年にわたり「心豊かで、気品に富み、洗練された近代女性（人）」としての「信念のある人」の育成を目指してきた。

大正12（1923）年には、「桜花高等女学校」が開設されている。第二次世界大戦後の学校制度改革の中で、昭和23（1948）年に「桜花学園女子高等学校・中学校」とし中等教育を担ってきた。

昭和30（1955）年に「名古屋短期大学」（「保育科」の単科短期大学）が創設され、その後、昭和51（1976）年に「英語科」（平成10（1998）年に「英語コミュニケーション学科」に名称変更）、昭和57（1982）年に「教養科」（平成10（1998）年に「現代教養学科」に名称変更）を設置して、時代のニーズに則してその内容を発展させ、高等教育発展段階の女子教育を担う「学園」として発展してきた。

平成2（1990）年に、学園の高等教育部門の一層の発展と社会への対応から、桜花学園の高等教育部門を担う新たな短期大学として、「豊田短期大学」（「人間関係学科」と「日本文化学科」）が設置された。

平成10（1998）年に、女子の高等教育に対する社会的ニーズに応えるため豊田短期大学の発展的な改組転換により「桜花学園大学」が創設され、「人文学部人間関係学科・比較文化学科」の1学部2学科、後に1学部3学科（「人間関係学科」「国際文化学科」「観光文化学科」）となった。平成14（2002）年には「保育学部保育学科」を設置したが、これは、就学前の教育・保育の専門職養成の高度化という時代のニーズに応えるという考えに基づくものである。

平成21（2009）年に、人文学部を改組転換して「学芸学部英語学科」を設置、平成30（2018）年には保育学部に「国際教養こども学科」を設置した。

令和6（2024）年に、男女共学化および学芸学部英語学科を改組転換して「国際学部英語学科」を設置した。

令和7（2024）年に、保育学部を教育保育学部、保育学科を教育保育学科に名称変更し現在に至る。

## 桜花学園大学

次は、本学の沿革と現況である。

|        |                                                                                          |
|--------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1998 年 | 桜花学園大学開学 人文学部人間関係学科（定員100人）、比較文化学科（定員100人）を設置                                            |
| 2000 年 | 人間関係学科の定員変更（100 人→150 人）、比較文化学科の定員変更（100 人→110 人）                                        |
| 2002 年 | 保育学部保育学科（定員 75 人）を設置                                                                     |
| 2002 年 | 大学院人間文化研究科（修士課程）人間科学専攻（定員5人）、地域文化専攻（定員5人）を設置                                             |
| 2003 年 | 比較文化学科を改組し国際文化学科（定員 80 人）、観光文化学科（定員 60 人）を設置、人間関係学科の定員変更（150 人→120 人）                    |
| 2005 年 | 国際文化学科の定員変更（80 人→70 人）                                                                   |
| 2007 年 | 人文学部の定員変更 人間関係学科（120人→65人）、国際文化学科（70人→35人）、観光文化学科（60人→50人）<br>保育学部の定員変更 保育学科（75 人→145 人） |
| 2007 年 | 保育学部に小学校教諭 1 種免許課程を設置                                                                    |
| 2007 年 | 大学院人間文化研究科人間科学専攻に幼稚園教諭専修免許課程を設置                                                          |
| 2009 年 | 人文学部の改組転換（人文学部募集停止）により学芸学部英語学科（定員 80 人）を設置                                               |
| 2011 年 | 大学院人間文化研究科人間科学専攻に小学校教諭専修免許課程を設置<br>大学キャンパスを名古屋キャンパスに統合                                   |
| 2013 年 | 人文学部廃止                                                                                   |
| 2016 年 | 保育学部保育学科の定員変更（145 人→175 人）、学芸学部英語学科（80 人→50 人）                                           |
| 2018 年 | 保育学部国際教養こども学科（定員 45 人）を設置 保育学科の定員変更（175 人→130 人）                                         |
| 2019 年 | 保育学部保育学科に特別支援学校教諭一種免許（知的障害者、肢体不自由者、病弱者）の課程を設置                                            |
| 2024 年 | 男女共学化<br>学芸学部英語学科を国際学部国際学科に改組                                                            |
| 2025 年 | 保育学部を教育保育学部、保育学科を教育保育学科に名称変更                                                             |

## 2. 本学の現況

- ・大 学 名 桜花学園大学（Ohkagakuen University）
- ・所 在 地 愛知県豊明市栄町武侍48
- ・学部構成 教育保育学部（Faculty of Childhood Education and Care）  
教育保育学科（Department of Childhood Education and Care）  
国際教養こども学科（Department of Global Early Childhood Education）

桜花学園大学

国際学部 (Faculty of Global Studies)

国際学科 (Department of Global Studies)

学芸学部 (School of Liberal Arts)

英語学科 (Department of English)

・研究科構成 人間文化研究科 (修士課程) (Graduate School of Humanities & Social Studies)

地域文化専攻 (Major in Regional Culture)

人間科学専攻 (Major in Human Science)

・学生数、教員数、職員数 (令和 7 (2025) 年 5 月 1 日)

1) 学生数

| 学部・研究科            | 学科・専攻     | 入学<br>定員 | 編入<br>定員 | 収容<br>定員 | 在籍者数 (下段は男子学生数<br>内数) |             |     |     | 在籍 総<br>数   |
|-------------------|-----------|----------|----------|----------|-----------------------|-------------|-----|-----|-------------|
|                   |           |          |          |          | 1 年                   | 2 年         | 3 年 | 4 年 |             |
| 教育保育学部            | 教育保育学科    | 130      | 2        | 524      | 113<br>(7)            | 111<br>(5)  | 119 | 144 | 487<br>(12) |
|                   | 国際教養こども学科 | 45       | 3        | 186      | 20<br>(2)             | 25          | 31  | 23  | 99<br>(2)   |
| 学芸学部              | 英語学科      | 50       | 5        | 110      | —                     | —           | 15  | 16  | 31          |
| 国際学部              | 国際学科      | 50       | 5        | 100      | 62<br>(4)             | 51<br>(9)   | —   | —   | 113<br>(13) |
| 学部合計              |           | 225      | 10       | 920      | 195<br>(13)           | 187<br>(14) | 165 | 183 | 731<br>(27) |
| 人間文化研究科<br>(修士課程) | 地域文化専攻    | 5        | —        | 10       | 0                     | 0           | —   | —   | 0           |
|                   | 人間科学専攻    | 5        | —        | 10       | 2<br>(1)              | 13<br>(5)   | —   | —   | 15<br>(6)   |
| 研究科合計             |           | 10       | —        | 20       | 2<br>(1)              | 13<br>(5)   | —   | —   | 15<br>(6)   |

※学芸学部英語学科は令和 6 年 4 月国際学部国際学科に改組

※※人間文化研究科の長期履修生を 2 年生の在籍者数とともに示す

2) 教員数

| 学部学科   |           | 専任教員数 |     |    |    |    | 非常勤教員数 |
|--------|-----------|-------|-----|----|----|----|--------|
|        |           | 教授    | 准教授 | 講師 | 助教 | 総数 |        |
| 教育保育学部 | 教育保育学科    | 14    | 3   | 0  | 2  | 19 | 35     |
|        | 国際教養こども学科 | 5     | 3   | 0  | 0  | 8  | 6      |
| 保育学部計  |           | 19    | 6   | 0  | 2  | 27 | 41     |
| 国際学部   | 国際学科      | 9     | 2   | 0  | 0  | 11 | 27     |
| 国際学部計  |           | 9     | 2   | 0  | 0  | 11 | 27     |
| 共通教育   |           | —     | —   | —  | —  | —  | 21     |
| 大学計    |           | 28    | 8   | 0  | 2  | 38 | 89     |

桜花学園大学

| 研究科・専攻  |        |    |   |   |   |    |   |
|---------|--------|----|---|---|---|----|---|
| 人間文化研究科 | 人間科学専攻 | 9  | 2 | 0 | 1 | 12 | 5 |
|         | 地域文化専攻 | 4  | 1 | 0 | 0 | 5  | 0 |
| 研究科計    |        | 13 | 3 | 0 | 1 | 17 | 5 |

※国際学部国際学科に学芸学部英語学科の数を含む

3) 職員数

| 専任職員 | 嘱託 | パート（アルバイトを含む） | 総数 |
|------|----|---------------|----|
| 16   | 2  | 1             | 19 |

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | 教育保育学部 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|
| <p><b>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</b></p> <p>P（目標）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 学生による主体的な活動の積極的な支援を行い、学部間・学科内・学年間の連携交流の強化を図る。</li> <li>2 保育学部 175 名定員の入学生に対する教育の質保証と点検を行う。</li> <li>3 日本高等教育評価機構による 2023 年度認証評価の結果を踏まえて、両学科で 2021-2025 中期目標・計画の修正を行う。</li> <li>4 入学定員数の遵守とその充足の継続に努める。</li> <li>5 2024 年度からの男女共学に際して、男子学生を多数獲得することを目指す。</li> <li>6 卒業生（現役保育者等）との教育・実習・就職関連の連携を図る。</li> </ol> <p>D（実行）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 2024 年度より学部学生運営委員会の組織編成を行い、より学生が主体的、協同的に取り組む活動の支援を行ったことで、学科内・学年間の連携交流の強化は概ね図ることができた。</li> <li>2 保育学科と国際教養こども学科の教員が相互に連携し、教育の質保証と点検を学部研修会および学科研修会等において行うことができた。</li> <li>3 学部研修会にて、2021-2025 中期目標・計画の点検を行うとともに、2026-2030 中期目標・計画に向けての課題を確認した。</li> <li>4 入学定員数の遵守とその充足に努めたが、保育者・教育者を目指す受験生が全国的に減少していることも影響して、2 学科とも定員を確保することができなかつたため、広報活動等を強化するなどの努力を継続的に行う。</li> <li>5 男子学生の獲得については、保育学科ではスポーツ推薦も含め 7 名（前年度 5 名）、国際教養こども学科では 2 名（前年度 0 名）と両学科ともに微増した。</li> <li>6 実習指導、教職実践演習、保育実践演習等の授業において、卒業生（現役保育者等）との教育・実習・就職関連の連携を図ることができた。</li> </ol> |        |
| <p><b>(2) 令和 6 年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 保育学科（教育保育学科）においては、2026 年度からの免許・資格取得に関する緩やかなコース制という制度変更を行うことができたが、さらに国際学部にて科目等履修生として、中学校教諭一種免許状（英語）の取得可能な履修モデルを検討する。</li> <li>2 両学科ともに定員を確保することができなかつたため、引き続き入試区分の定員数の見直しと学生獲得に向けた具体的かつ効果的な方策を実行する。</li> </ol>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |        |

- 3 桜花学園高校との教育的接続については、年間を通して3年生保育コースの学生を対象とした連携事業を実施し、保育コースの生徒たちの動機づけに資する教育活動や情報提供を行うことができた。今後も高校側との連携を密として、さらなる入学者増に繋げていく。
- 4 アセスメント・ポリシーにもとづき、教学マネジメントの適正化をはかるためのIR（大学を取り巻く環境の分析、教育研究の実態、学生の実態の把握）を進めることができた。今後もデータを検証しつつ、教育・学生支援の充実を図る。

評価に用いた指標（資料名）

- ・学部研修会記録
- ・学部研修会議事録(各部署 PDCA 添付資料を含む)
- ・2024 年度事業計画書（法人提出用）
- ・2021-2025 中期計画・事業計画書（法人提出用）

### (3) 令和7年度以降の行動計画（P）

- 1 教育保育学科においては、2026 年度からの免許・資格取得に関する緩やかなコース制という制度変更を行うことができたが、国際教養こども学科においては、教育課程、編入制度等の変更を早急に検討する必要がある。
- 2 175 名の学部定員を充足するため、スポーツ推薦による入学者増、本学への進学実績の高い高校との高大連携協定の締結など、具体的かつ効果的な方策を実行する。
- 3 桜花学園高校との教育的接続については、引き続き3年生保育コースの学生を対象とした連携事業を実施するとともに、文系コースにて教員志望の生徒たちの動機づけに資する教育活動や情報提供を行う。

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 教育保育学科 |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|
| <b>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</b>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |        |
| <p>P（計画）</p> <p>【学生募集】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①入試形態の検討</li> <li>②SNS 等の活用</li> <li>③OC の検討</li> </ul> <p>【教育・学生支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>④学生の個性や学修レベルに合わせた指導</li> <li>⑤学生の自主実習やボランティア活動等、主体的な活動の支援</li> <li>⑥IR の推進</li> </ul> <p>【教育・研究活動における新たな魅力の創出】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>⑦2024 年度からの新教育課程、7 つのスペシャリストの魅力の創出</li> <li>⑧学部学生運営委員会活動の充実</li> <li>⑨教員の志望意欲が高い学生の入学希望者の増進を図る。</li> <li>⑩障害学生支援の充実</li> <li>⑪桜花学園高校との教育的接続の強化</li> </ul>                                                                                                                                                           |        |
| <p>D（実行）</p> <p>【学生募集】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①指定校入試の指定基準の見直し</li> <li>②SNS やインスタグラム等を活用した広報活動</li> <li>③OC の回数増加と開催形式の改善</li> </ul> <p>【教育・学生支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>④実習指導を含め、「就学指導学生の確認」をもとに、個々の学生の個性や学修レベルに合わせた、きめ細かい指導の実施。</li> <li>⑤学部学生運営委員をサポートし、学生による主体的な活動を積極的に推進。</li> <li>⑥教学マネジメントの適正化をはかるための IR（大学を取り巻く環境の分析、教育研究の実態、学生の実態の把握）活動の推進。</li> </ul> <p>【教育・研究活動における新たな魅力の創出】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>⑦スペシャリスト科目の学びの価値づけの可視化。</li> <li>⑧学生プロジェクト、子どもプロジェクトの自主的で活発な学部学生運営委員会活動の推進</li> <li>⑨小学校教諭、特別支援学校教諭の魅力と就職実績の可視化により高校や社会に周知を図る</li> <li>⑩障害学生への理解を深めるための、学科及び大学全体での研修会の実施</li> </ul> |        |

⑪桜花学園高校3年生保育コースの学生を対象とした連携事業の実施（年間3回）

## **(2) 令和6年度末点検結果と継続課題 (C) (A)**

C(評価)

### **【学生募集】**

①指定校入試希望者は微増した

②教育保育学科インスタグラムのフォロワー数

＊2024年6月13日1,000名⇒2025年5月23日現在1,283名に増加

＊投稿にアクションを実行した人が、後に学科Instagramのプロフィールにアクセスした数⇒1件に対して約180回、学科Instagramのプロフィールにアクセス。

③OCの総参加者数が62名増加した。

### **【教育・学生支援】**

④学科内で、個々の学生の個性や学修レベルを共有し、学生の理解や理解に基づいた対応について共通認識が得られ、連携した的確な対応へと繋がった。

⑤学部学生運営委員会を中心として、学年ごとに学生主体の活発な交流がなされた。

⑥IR（大学を取り巻く環境の分析、教育研究の実態、学生の実態の把握）活動の聖愛をHPや学内掲示などを通して可視化することで、教育保育学科を取り巻く現状と課題の把握がなされた。

### **【教育・研究活動における新たな魅力の創出】**

⑦スペシャリスト科目の学びの価値づけの可視化は、十分ではなく、スペシャリスト未認定者をできる限り少なくするための戦略も含め継続課題である。

⑧学年間の交流と活動時間の捻出に課題が残った。

⑨小学校教諭、特別支援学校教諭の魅力と就職実績の可視化が十分ではなく、高校や社会における、小学校教諭、特別支援学校教諭を養成する大学としての知名度は低いままであった。

⑩障害学生支援について、アクセスビリティ委員会と連携し、研修の実施及び教育保育科としての対応方針マニュアルを作成した。また、それに基づき障害学生への配慮に関して、学科で共通理解を深め、実践を行った。

⑪桜花学園高校からの教育保育学科への進学者は微増であった。

D(改善)

### **【学生募集】**

①教育保育学科のアドミッションポリシーや目指す教師像/保育士像に基づく入試形態及び、保護者向けのOC等、高校生や保護者に響くOCの形態を継続して検討する

②2026年度からの「四免許取得可」から緩やかなコース制への制度変更に関する、わかりやすい説明とアピールポイントの可視化とOCや高校訪問などでの十分な説明による周知を図る。

③SNS の活用については特に改善事項は無いと判断する。

【教育・学生支援】

④指導を要する学生の情報にアクセスしやすくする仕組みを構築する。

⑤特に改善事項は無いと判断する。

⑥特に改善事項は無いと判断する。

【教育・研究活動における新たな魅力の創出】

⑦2026 年度からのスペシャリストの位置づけ（ゼミ選択とスペシャリスト。資格・免許とスペシャリスト）のわかりやすい説明と魅力づけの可視化と OC や高校訪問などでの十分な説明による周知を図る。

⑧学部学生運営委員活動の活動方法について、より学生主体で活動しやすい方向を検討する。

⑨小学校教諭、特別支援学校教諭の魅力と就職実績の可視化と OC や高校訪問などでの十分な説明による周知を図る。

⑩特に改善事項は無いと判断する。

⑪3 年生保育コースだけではなく、教員志望のいる生徒の他のクラスとも模擬授業等の連携事業を実施する。

【評価に用いた指標（資料名）】

教務委員会報告書・総括

学生委員会報告書・総括

入試委員会報告書・総括

FD 報告書・総括

ゼミ委員報告書・総括

実習委員会報告書・総括

学びのカルテ

教育保育学科中長期計画ワーキング 2026－2030 計画書

(3)令和 7 年度以降の行動計画 (P)

【学生募集】

①入試及び、OC の形態を継続して検討する

②2026 年度からの緩やかなコース制への制度変更に関する、わかりやすい説明とアピールポイントの可視化と周知。

③SNS の活用は、継続。

【教育・学生支援】

④指導を要する学生の情報にアクセスしやすくする仕組みを構築する。

⑤学部学生運営委員をサポートし、学生による主体的な活動を積極的に推進。

⑥IR 活動をホームページや学内掲示などを通して社会へ公示するとともに、教育への

反映を継続して行う。

**【教育・研究活動における新たな魅力の創出】**

- ⑦2026 年度からのスペシャリストの位置づけ（ゼミ選択とスペシャリスト、資格・免許とスペシャリスト）のわかりやすい説明と魅力づけの可視化と OC や高校訪問などでの十分な説明による周知を図る。
- ⑧学部学生運営委員活動の活動方法について、より学生主体で活動しやすい方向を検討する。
- ⑨小学校教諭、特別支援学校教諭の魅力と就職実績の可視化と OC や高校訪問などでの十分な説明による周知を図る。
- ⑩様々な障害を持つ学生に配慮した対応ができるよう、継続して学科内で研修活動を実践し、理解を深める。
- ⑪3 年生保育コースだけではなく、教員志望のいる生徒の他のクラスとも模擬授業等の連携事業を実施する。

| 評価単位名                                                            | 国際教養こども学科 |
|------------------------------------------------------------------|-----------|
| <b>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</b>                                   |           |
| P（計画）                                                            |           |
| 【教育・学生支援】                                                        |           |
| ① 学部教育理念である「参加・共同・創造」の周知と具現化                                     |           |
| ② 保育学科との教育連携                                                     |           |
| ③ DPに基づくカリキュラム点検と変更の検討                                           |           |
| ④ 自主実習やボランティア活動の支援                                               |           |
| ⑤ 海外における危機管理体制の充実                                                |           |
| ⑥ 学びのカルテの活用                                                      |           |
| 【学生募集】                                                           |           |
| ⑦ 入学定員数の遵守と充足に努め、指定校等の基準を精査                                      |           |
| ⑧ 広報における学科や保育・幼児教育職の魅力の伝達                                        |           |
| ⑨ 男子学生の入学に向けた広報                                                  |           |
| ⑩ 広報重点校への広報や出張講義                                                 |           |
| ⑪ 桜花学園高校との連携                                                     |           |
| 【その他】                                                            |           |
| ⑫ 卒業生との連携                                                        |           |
| ⑬ 国際学部及び名古屋短期大学保育科との教育・研究等の連携                                    |           |
| D（実行）                                                            |           |
| 【教育・学生支援】                                                        |           |
| ① オリエンテーションや節目の機会に周知を行った。学科運営行事等を創出することで、具現化に努めた。                |           |
| ② 合同学科会議をほぼ毎月開催し、連絡事項や就学指導対象学生の把握と対応について議論する機会を設けた。              |           |
| ③ 2026年度に改訂されるDPと、それに対応したAPを策定した。                                |           |
| ④ 各学年の合同ゼミで、ボランティア活動の意義と手続きについて周知した。また、ボランティア依頼について学生にアナウンスを行った。 |           |
| ⑤ 国際交流支援センターと連携を取り、留学準備の授業や保護者会等の機会に海外での危機管理について伝達した。            |           |
| ⑥ 保育履修カルテ及び教職履修カルテとの連動を図り、運用した。                                  |           |

**【学生募集】**

- ⑦ 指定校依頼の基準の見直しを行った。
- ⑧ OC・OLOC、HP や SNS で積極的に学科と幼児教育・保育職の魅力について発信し続けた。
- ⑨ 男女共学化の 1 年目として、広報に努めた。
- ⑩ 過去の入学実績が複数ある高校を広報の重点校と定めた。
- ⑪ 懇談会や懇親会、説明会や連絡会で学科の様子や教育内容を伝達した他、保育コースの生徒に直接プレゼンテーションする機会を作った。

**【その他】**

- ⑫ 夏季保育セミナーを中心に、実践演習授業のスピーカーとしてなど、卒業生と在校生のコンタクトする機会を作った。
- ⑬ 連合と大学単位の会議等が、連携する機会となった。

**(2) 令和 6 年度末点検結果と継続課題 (C) (A)**

**C(評価)**

**【教育・学生支援】**

- ① 学生自らが学部理念を具現化する意識を持つには至っていない。
- ② 一定の評価は出来るが、特定の話題について深く議論する機運は醸成されていないと考えられる。
- ③ 年度目標は達成できた。
- ④ 年度目標は達成できた。
- ⑤ 年度目標は達成できた。
- ⑥ ゼミ教員間で扱いが異なる部分が見られる。

**【学生募集】**

- ⑦ 定員遵守には至らなかった一方で指定校依頼基準の見直しの目標は達成できた。
- ⑧ 年度目標は達成できた。
- ⑨ まだ不十分な部分があると考えられる。
- ⑩ 重点校を定めたが、個々の高校訪問までは至らなかった。
- ⑪ 複数年度で連携を捉える必要性を再認識した。また、学科の魅力をどのように伝達するかについて、更なる議論が必要である。

**【その他】**

- ⑫ 一部の活動に限定されているで、今後更に力を入れる必要がある。
- ⑬ 更なる教育・研究等の連携が可能と考えられる。

#### D (改善)

##### 【教育・学生支援】

- ① ゼミ単位や専任教員の授業を中心に、学部理念とその具現化について案内や指導の機会を増加させる。
- ② 学部運営協議会を中心に、学部単位での特定の話題や課題について議論する機運と環境を醸成していく。
- ③ 引き続いて、CPと「目指す保育士像・教師像」を策定する。
- ④ ボランティア活動について、学科会議の報告をルーティン化する。
- ⑤ 留学担当を中心に、改善点について点検を続ける。
- ⑥ ゼミ委員会を中心に、期末の議題として取り上げることをルーティン化する。

##### 【学生募集】

- ⑦ 更に積極的な学科独自の広報、入試広報課との連携を密にする必要がある。
- ⑧ グローバル時代の保育の魅力について、社会全般に対しても発信することに努める。
- ⑨ 男子高校にも広報するなど、更に積極的に広報できる可能性がある。
- ⑩ 教員の訪問を割り当て、高校訪問を確実に行う。
- ⑪ 卒業生による学科の魅力の発信をこれまで以上に行う。高校との連絡体制を確立する。連携のプログラムを創出する。

##### 【その他】

- ⑫ 卒業生と在校生の縦の繋がりを担保するイベント等を創出する。
- ⑬ 学部運営協議会から連合運営協議会への働きかけについて議論する。

##### 【評価に用いた指標（資料名）】

教務委員会 2024 年度総括資料

学生委員会 2024 年度総括資料

入試委員会 2024 年度総括資料

FD2024 年度総括資料・報告書

ゼミ委員会 2024 年度総括資料

実習委員会 2024 年度総括資料

学びのカルテ

学科将来計画ワーキング資料

法人提出中期計画・事業計画（2021 - 2025）

#### (3)令和7年度以降の行動計画 (P)

##### 【教育・学生支援】

- ① 教育保育学科との相互連携による教育の質保証と点検を行う。
- ② 2026年度のDP改訂に向け、国際教養科目（語学系、地域研究、必修・選択と学年配当の整理）のカリキュラム改革を行う。
- ③ 学部教育理念の理解促進と具現化を行う。
- ④ 「子ども主体の保育」「環境を通した保育」「多文化共生保育」をキーワードに、ニュージーランドとオーストラリアへの留学と国内での学びの連動性を、ゼミや実習等を柱に更に整理していく。
- ⑤ DPに基づいた、コミュニケーション力、人間力とアイデンティティ形成等に向けて学部理念に基づいた学科教育を深化させる。
- ⑥ 海外における危機管理体制を点検する。
- ⑦ 学びのカルテの運用方法を学修の充実に向けて改善する。

#### 【学生募集】

- ⑧ 男子学生を含む多様な背景を持つ学生の受け入れを進める。
- ⑨ 進路決定の早期化に対応するため、付属高校を含む高校との連携を強化する。
- ⑩ 入試広報課との連携による学科独自の広報に取り組む。県内外の重点校に対する広報や出張講義を行い学科の魅力と独自性を伝達し、学科の全国的な知名度を上げる活動を行う。

#### 【その他】

- ⑪ 卒業生や地域、保育現場との結びつきや連携を強化するための企画・イベントを立ち上げる。
- ⑫ 国際学部と名古屋短期大学保育科教員との教育・研究・社会貢献などの分野での連携をさらに強化する。

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              | 国際学部・学芸学部 |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|
| <p><b><u>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</u></b></p> <p>P（目標）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 学部カリキュラムを検証し、必要箇所の補完を検討する。</li> <li>2 入学者確保のための入試傾向を分析し、対策を検討する。</li> <li>3 学部特性化に向けて新企画を提案する。</li> <li>4 各部署間の協力連携体制を強化できる仕組みを構築する。</li> </ol> <p>D（実行）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 (1) 学生の履修状況、専攻選択の結果などを基に、科目配置のバランスがよくない専攻について補充策を検討した。</li> <li>1 (2) 各専攻の特徴を改めて引き立たせるために、各専攻内の科目と特性を可視化できるよう、シラバス検討会などを行った。</li> <li>1 (3) 学生の学修支援のために、検定・資格の単位認定や奨励賞、受験料支援などを制度化し、規程を作成した。</li> <li>2 (1) 指定校、各入試類型別募集人員枠、編入学入試を見直し、適正に変更した。</li> <li>2 (2) 適正定員を管理した。</li> <li>3 (1) 海外の提携大学から日本文化研修生を受け入れるプログラムを企画し、実施した。</li> <li>3 (2) 学修指導方法を見直し、アカデミックアドバイザーが実質的に機能できるようにした。</li> <li>3 (3) 交換留学、ダブル・ディグリー留学等、学部の特色とも言える留学プログラムもガイドラインを完成し、規程化した。</li> <li>3 (4) 在学生の主体性及びアイデンティティ確立のために、ガイダンスや説明会、イベント等を通して浸透できるよう働きかけた。</li> <li>4 (1) 実務遂行の効率化について、学科内で問題提起し、意識付けを図った。</li> <li>4 (2) 体制改善に向けてチームを構成し、認識共有しながらサポートを試みた。</li> </ol> <p><b><u>(2) 令和6年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</u></b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 4専攻の学びをさらに強化するための新プログラムの立案はできたものの、具体的な運営案についての議論が今後必要である。</li> <li>2 入学者数65人という目標に至らなかった。4年後の定員増目標の実現に向けて段階的に入学者を増やしていく対策として、OC参加者への実質的なフォローと、魅力的な新プログラムについての有効なPRを実施する必要がある。</li> <li>3 国際交流関連の以外の国内志向の企画に向けて外部機関に打診を試みたが、実りのある結果は得られなかった。発想を転換してより実現可能な企画を検討する必要がある。</li> </ol> |           |

る。

- 4 業務の効率化につながる連携の一環として部署ごとにサポートメンバーを付けたりして、多少は無用な議論や作業を短縮することはできたが、体制構築までには至らなかった。継続的に検討する必要がある。

評価に用いた指標（資料名）

- ・学部 FD 研修会記録
- ・学部研修会議事録(各部署 PDCA 添付資料を含む)
- ・学園規程集
- ・2024 年度事業計画書（法人提出用）
- ・2021-2025 中期計画・事業計画書（法人提出用）

### (3) 令和 7 年度以降の行動計画 (P)

#### 【学部の魅力向上】

- 1 4 専攻の学びをさらに強化するための新プログラムの実施に向けて着手する。
- 2 資格取得に重点を置いた国内留学プログラムの実施に向けて着手する。
- 3 国内にいながらオンラインで留学可能なプログラム案を検討する。

#### 【学生支援の充実化】

- 1 多様な背景の学生及び学力不振学生のための学修支援体制について具体的に検討する。
- 2 キャンパス内の人的リソースを有効活用した学部独自のキャリア支援の仕組みを検討する。

#### 【入学者確保】

- 1 歩留率を上げる。受験率を上げる。偏差値を上げる。入学者数を上げる。⇒ 定員増の実現化を図る。
- 2 入試制度の見直し及び検証を継続すると同時に、受験者への丁寧かつ誠実なフォロー体制を保持する。
- 3 学部の魅力向上、学生満足度を上げるための上記計画を具現化、それらの有効な PR・広報対策を継続検討する。

| 評価単位名                                                                                                         | 国際学部国際学科・学芸学部英語学科 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------|
| <b><u>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</u></b>                                                                         |                   |
| P（計画）                                                                                                         |                   |
| 1：1年生を中心とした必修留学支援と指導                                                                                          |                   |
| 2：2～4年生の協定留学・提携留学・自由留学の支援と指導                                                                                  |                   |
| 3：英語圏以外の留学支援と指導                                                                                               |                   |
| 4：JASSOを中心とした留学奨学金の獲得                                                                                         |                   |
| 5：国際学部国際学科完成年度に向けた中期視野での学生確保の準備                                                                               |                   |
| 6：国際学部国際学科2学年在籍に向けたスムーズな学生間交流のための組織づくり                                                                        |                   |
| 7：就職支援と国内インターンシップ支援                                                                                           |                   |
| 8：学芸学部在籍の全盲学生の留学支援                                                                                            |                   |
| 9：望ましいオリエンテーションの実施                                                                                            |                   |
| D（実行）                                                                                                         |                   |
| 1：国際学部学生の幅広い留学興味に対応すべく、英語圏2プログラム、韓国プログラムを用意して対応した。英語圏については費用の高騰から、価格が比較的低くて済むアジア圏（シンガポール）での英語留学プログラムを初めて実施した。 |                   |
| 2：希望が出された、提携に基づく交換留学・提携留学・自由留学のすべてが実施され、希望学生への指導を実施した。                                                        |                   |
| 3：提携に基づく韓国への交換留学・提携留学（韓国）国費留学・インドネシア（日本語教師インターンシップ）が実施された。                                                    |                   |
| 4：JASSO奨学金に6プログラム申請し、その内2プログラムが採択となった。                                                                        |                   |
| 5：国際学部国際学科の定員50名以上を2年連続で確保できる見通しとなった。そのために通常のOCに加え、オンラインOC、高校での説明会に可能な限り出席した。                                 |                   |
| 6：国際学部の上級生が下級生に楽手アドバイスなどを行う「メンター制度」を構築した。                                                                     |                   |
| 7：学科内学生委員会・企業研究担当者により支援を実施した。また、就職への意識づけとして、1年次のゼミ（基礎演習）・2年次のゼミ（Basic Seminar）における修飾講話を継続的に実施した。              |                   |
| 8：留学委員会が中心となって英国のホームティーチャー制度を活用する留学実施の準備を行い、その目処がついた。                                                         |                   |
| 9：昨年度の反省のもとに、改善版のオリエンテーションを実施した。                                                                              |                   |
| <b><u>(2) 令和6年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</u></b>                                                                     |                   |
| C（評価）                                                                                                         |                   |

1：次年度に留学を実施する予定の学芸学部在籍の全盲学生を除き、すべての国際学部・学芸学部学生が必修・選択留学を無事に終えることができた。学科内の留学委員会が定期的に開催され、この委員会が十分に機能したと判断する。

2：留学希望があるすべての学生に対して、学科内留学委員会が指導を行い、希望全員の留学を実施することができた。また、同委員会が国際交流支援センターと密な連携をとっており、すべての留学に対して、危機管理説明を実施することができた事実は、安全・危機管理の点でも前記委員会がきちんと機能していると判断する。

3：英語圏以外の国・地域への留学について、韓国・インドネシアにそれぞれ提携に基づく留学が実施され、その成果が TOPIK などの結果に現れた。これについて留学効果が総合的に良く出ていると肯定的に判断する。また、韓国については4年連続国費留学の合格者を学科から出していることも、留学支援が英語圏に限らずきちんとできていると判断する。

4：前年度より採択率が下がったが、依然として必要なレベルの採択率を維持したと判断する。

5：定員確保に長年課題を抱えていたが、一転、国際学部になって2年連続で定員確保確実となった点は十分に評価できる。入試委員を中心として、学科全員で幅広い語学・オンライン OC も加えた新しい OC のあり方・高校での模擬授業のあり方を考え、それらを実施した成果だと考える。

6：上級生による学修指導などを行うメンター制度のあり方を考えた。

7：スムーズな支援ができた。学科内で就職委員会が発足し、この委員会が十分に機能した結果の1つだと考える。

8：留学委員会・本人・保証人との連携がうまくとれ、令和7年度中に実施できる目処がついたのは大きな成果だったと考える。

9：学生委員の尽力により、必要な内容をできるかぎりコンパクトまとめることができた。と考える。しかし、一部の内容については、分かりにくいという声があった。

#### A（改善）

1：2024年度実績に関して、新たに実施したシンガポールプログラムは改善の余地が多いと判断できる。それ以外の改善点はないと考えている。

2：2024年度実績に関しては、特に改善事項はないと判断する。

3：2024年度実績に関しては、特に改善事項はないと判断する。

4：受け入れについての採択率が依然として低く、ここの部分の対策・改善が必要である。また、派遣についても採択率が下がってしまった点については改善が必要である。

5：後半の入試でも一定の受験生がいたことも含め、改善事項はないと判断する。引き続き定員の1.5倍程度の入学者確保に向けた努力が必要となる。

6：国際学科について、学年を超えた望ましい学生交流のあり方を引き続き模索する必要

がある。

7：2024年度実績に関しては、特に改善事項はないと判断する。

8：初めて実施する全盲学生のためのプログラムが無事に行われるのか、注視する必要がある。

9：一部のわかりにくいという声を改善したプログラムを、2026年度は実施する必要がある。

評価に用いた指標（資料名）

・資料名「OLSI 満足度調査結果」「全盲学生用留学指導記録」「根拠資料留学関連」→評価項目1～3・8

・学科外保管資料「桜花学園大学自己点検評価書（評価単位版）国際交流センター」→評価項目4

・資料名「選抜試験入学結果」→評価項目5

・学科外保管資料「学生委員会管轄、教授会報告によるキャンパス各学科の就職結果」→評価項目7

・Orientation feedback→評価項目9

### (3) 令和7年度以降の行動計画 (P)

1：令和6年度実施の内容を踏まえた必修留学支援と指導

2：2～4年生の協定留学・提携留学・自由留学の支援と指導

3：JASSOを中心とした留学奨学金の獲得（受け入れ・送り出し両方）

4・5：国際学部国際学科の安定的な運営に向けた学生確保の取り組み

6：国際学部国際学科開設に伴うスムーズな学生間交流のための組織づくり

7：就職支援と国内インターンシップ支援

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | 大学院 人間文化研究科 |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| <p><b><u>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</u></b></p> <p>1) 3-2-③ 地域文化専攻カリキュラムの審議継続<br/> 3-2-③ 人間科学専攻の科目の継続審議<br/> 人間科学専攻の科目「保育内容特論Ⅰ・Ⅱ」の担当者確定に加え、幼稚園専修免許と小学校専修免許科目の差別化を進める新設科目を検討する。</p> <p><b><u>(2) 令和6年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</u></b></p> <p>1) 3-2-③ 地域文化専攻カリキュラムは審議継続中であるが、「哲学特論Ⅰ・Ⅱ」を廃止し「人間学特論Ⅰ・Ⅱ」を、また「女性史特論Ⅰ・Ⅱ」を廃止し「ジェンダー特論Ⅰ・Ⅱ」を新規科目として開設し、全国公募にて担当者を選出し、令和7年4月からの運用開始とした。</p> <p>3-2-③ 人間科学専攻の科目の継続審議<br/> ・人間科学専攻の科目「保育内容特論Ⅰ・Ⅱ」の担当者は令和7年度に決着予定。<br/> ・「障害児心理学特論Ⅰ・Ⅱ」の新規担当者が確定し、令和7年4月から運用開始とした。</p> <p>2) 3-2-③、4-2-①、4-4-①？ 両専攻共通<br/> ・科目「特論Ⅰ・Ⅱ」の複数担当制を検討し、「科目共同担当教員審査に関する覚書」（2024年6月5日）を作成し、審議承認した。<br/> ・チーム指導体制（修論の主査1名、副査2名）について院生数増加の点から再検討した結果、体制を現状維持することとした。<br/> ・修論査読手当の要望検討は当面保留とした。</p> <p>3) 2-4-① ストレートマスターへの授業料貸与の開始<br/> ・この点を各学科の四年生へ年度内に広報することとした。</p> <p>4) 入試の運営体制の再検討と新規運用開始<br/> ・一般入試、社会人入試を含めた年度当初に確定し運用することとした。</p> <p><b><u>(3) 令和7年度以降の行動計画 (P)</u></b></p> <p>・院生数の増加傾向にあり、学部業務（授業含む）と大学院業務を兼ねる際、学部業務のみの教員とワークバランス、研究へのエフォート確保について継続的に検討をしていく必要がある。</p> |             |

桜花学園大学 自己点検評価書（評価単位版）

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          | 教育・保育職支援センター |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|
| <p><b>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</b></p> <p>(1) P（計画）</p> <p>P－1：就職相談と指導</p> <p>P－2：学生面談</p> <p>P－3：学修支援環境整備</p> <p>P－4：センターの広報活動</p> <p>P－5：卒後支援</p> <p>(2) D（実行）</p> <p>①保育職を希望する学生は、保育内容に関する面接練習、保育実技、集団面接・実技に関する練習と相談を主に行った。小学校教諭を希望する学生は採用試験の個人面接の準備や練習などを行った。</p> <p>②桜保1年生は2024年12月24日～2025年1月17日の期間に基礎面談を実施した。昨年度同様、幼稚園・保育園への就職希望者と、小学校・特別支援学校への就職希望者に分けて進路動機や今現在の就職に対する考えや思いなどを聴き取り基礎面談の充実を図った。また小学校・特別支援学校への希望者は2～4年次にも面談を行った。</p> <p>③学生が訪れやすいよう環境整備は意識したが、大きな整備は行わなかった。</p> <p>④ホームページで継続的に広報活動を行った。</p> <p>⑤通年を通して個別相談を受け付けた。また、学生課主催の相談会(4月)への支援員参加や、センター主催の卒業生相談カフェ(11月)を実施した。</p> |              |
| <p><b>(2) 令和6年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</b></p> <p>(1) C（確認）</p> <p>①2024年度の就職相談人数は108名であった。2023年度にセンターを利用した学生は132名だった。2022年度は31.8%（142/446名）、2023年度は32.3%（132/408名）、2024年度は30.5%（108/354名）であった。今年度は学生課が行う「学生アンケート」（学生満足度調査）にて、アンケート番号Q.38の「教育・保育職支援センターの支援は充分であったか」の問いに対して「とてもあてはまる」「ややあてはまる」が92.3%であり、昨年度の83.8%を上回った結果となった。</p> <p>②基礎面談は①進路動機、②人間関係、③実習評価を踏まえた実習中の様子や悩み、④現時点での就職について、大学生活や実習に関する悩みなどが軽減できるよう学生の思いに寄り添い共に考えるよう行った。小学校や特別支援学校への就職希望者は1年次12月までに小学校免許を取得するか等について意思確認、2年次</p>                                                                                                          |              |

は教育実習Ⅱの終了後に最終的な進路相談、3年次は学校ボランティアにおいて体験した指導の悩みや不安、次年度実施の採用試験への準備について、4年次は教育実習Ⅳにおける授業づくりの準備や心構え、採用試験への不安などについて希望者に面談を行った。

- ③ これまで同様に充実した支援活動を行うことができた。
- ④ HP が稼働したことにより、卒業生が相談予約や連絡先などの情報をインターネットからも得られるようになり、遠方に住む卒業生や電話による予約が難しい性格の卒業生でも気軽に相談を申し込めるようになった。
- ⑤ 「就職直後相談会（4月）」や「卒業生相談カフェ（11月）」といった対面型の支援は、卒業生のニーズにこたえる効果的な取り組みとして効果を上げることができた

## (2) A（改善）

- ① センターと学科・学生支援課の連携体制について継続的検討を行う。
- ② 2024年度実績に関しては、特に改善事項はないと判断する。
- ③ 2024年度実績に関しては、特に改善事項はないと判断する。
- ④ ホームページやSNSの運用など広報活動について継続的検討を行う。
- ⑤ 周知方法など継続的検討を行う。

## 評価に用いた指標（資料名）

- ・ 2024年度 学生アンケート（IR室実施）
- ・ 2024年度 センター報告書「教育・保育職支援センター 1年間のまとめ」

## (3) 令和7年度以降の行動計画（P）

- ・ 学修支援（個別相談）
- ・ 修学支援（個別相談）
- ・ 卒業生支援（個別相談、5月・11月の相談会）
- ・ ホームページやセンター通信の運用など広報活動
- ・ 関係部署との情報共有のあり方についての検討
- ・ センター報告書の作成

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | 地域連携センター |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|
| <p><b><u>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</u></b></p> <p><b>1. 大学公開講座の開催</b><br/>           一般市民を対象に、7月～9月の土曜日の午前（2時間）に5回開催。大学が持つ専門的教養・知識を地域の方にも広く開放し、社会的意義を高める</p> <p><b>2. 豊明市との包括連携協定に基づき豊明市と大学との相互の依頼事項の調整</b><br/>           多種にわたる相互依頼事項を確認調整することで、地域社会の発展に貢献する</p> <p><b>3. 名古屋市民大学講座の調整</b><br/>           名古屋市主催の公開講座で講演する教員を調整し、地域社会に貢献する</p> <p><b><u>(2) 令和6年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</u></b></p> <p><b>1. 大学公開講座の開催</b><br/>           6/29（102名）、7/13（100名）、7/20（73名）、7/27（78名）、8/10（74名）<br/>           参加者数：5回で427名（申し込みは500名近くだったが、猛暑の為か直前及び当日キャンセルが多かった）<br/>           アンケート回答：大変満足 67.6%、満足 23.5%、普通 2.0%、未回答 5.9%<br/>           年齢層：20歳代 14.7%、30歳代 5.9%、40歳代 5.9%、50歳代 20.6%、60歳代 20.6%<br/>           70歳代 23.5%、80歳代 5.9%<br/>           （課題）猛暑による当日キャンセルが多いため、開催時期の再検討が必要。</p> <p><b>2. 豊明市との包括協定案件数は 24件あり、全てが豊明市側からの協力依頼であった</b><br/>           （課題）大学側から豊明市へ協力依頼を進めることも検討する。</p> <p><b>3. 名古屋市民大学講座には前期・後期に1名で年間2名派遣した</b><br/>           （課題）より多くの教員が講演できるように広げる</p> <p><b><u>(3) 令和7年度以降の行動計画 (P)</u></b></p> <p>1. 大学公開講座の実施（9～10月で形態を変更して4回の予定）</p> <p>2. 豊明市との包括協定依頼書に基づき、教職員間の調整を行う</p> <p>3. 名古屋市からの依頼に基づき、教職員間の調整を行う</p> <p>4. その他自治体との協定書に基づく事業の推進を図る</p> |          |

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                | チャイルドエデュケア研究所 |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------|
| <p><b>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夏季保育セミナーの企画と運営（7月）<br/>卒業後1, 2年の卒業生を主な参加対象者としてのセミナーの開催。<br/>「遊びを一緒に楽しもう！ー明日から使える保育実践」をテーマとして、大学内の教員と豊富な保育者経験を持つ卒業生が講師となり、実践を交えた交流を行う。<br/>前年度と同様の体制、内容で実施する。</li> <li>・冬の講演会（10月）<br/>地域の教育・保育関係者を参加対象者としたリカレント教育として実施する。<br/>ニュージーランドと日本の保育士経験のある谷島直樹氏を講師に招き、講演会を開催する。</li> <li>・年報の作成<br/>年報2024 22号の発行。</li> <li>・子育て支援室「さくらんぼ」の企画・運営<br/>地域の未就園児を持つ子育て家庭の親子を参加対象者として、子育て交流会、支援室開放日を実施する。<br/>名古屋短期大学保育科と桜花学園大学教育保育学部のゼミやボランティアでの学生の学びの機会を提供する。<br/>「さくらんぼ通信」をホームページ及び紙媒体により、子育てに関する情報を発信。</li> <li>・豊明市子育て支援センター「たけのこ」との包括連携協定による学生の実践<br/>豊明市が実施主体である子育て支援センターの交流会に学生が参加する。</li> <li>・桜花学園大学・名古屋短期大学附属幼稚園「くまりん」子育て支援室「さくらんぼ」の一元化・一体化<br/>2025年度1年間を移行期間として継続して体制を検討する。</li> </ul> |               |
| <p><b>(2) 令和6年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夏季保育セミナー<br/>良好な運営であった。経験豊富な卒業生（15名）の参加は卒後1, 2年の卒業生に良い影響がもたらされた。実践的な内容であったこともあり好評であった。<br/>ハガキによる開催案内周知をLINEやSMSによる方法への変更を検討する。</li> <li>・冬の講演会<br/>良好な運営であった。ニュージーランドと日本の保育士経験をお持ちの谷島直樹氏による「心の窓を開いて、世界を広げようーニュージーランドから学んだ、大人と子どもの共生の輪と多文化理解」の講演では、教育・保育実践における重要な視点を学ぶ機会となった。参加者106名。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |               |

- ・年報の作成

締め切り期日を明確にし、計画通りに進めることができた。3 月末日に 22 号を発行することができた。

- ・子育て支援室「さくらんぼ」の企画・運営

参加人数は、子どもが 1,477 名、大人が 1,320 名。学生の参加は、22 ゼミ、227 名。円滑な運営を行うことができた。

利用者から身近にいる保育士への相談があり、相談内容に応じて教員につなぎ、対応することができた。

- ・豊明市子育て支援センター「たけのこ」との包括連携協定による学生の実践

2 ゼミ 19 名の学生が参加し、豊明市が行う子育て支援を実践的に学ぶことができた。

- ・桜花学園大学・名古屋短期大学附属幼稚園「くまりん」と子育て支援室「さくらんぼ」の一元化・一体化

こども誰でも通園制度を見通しながら一元化に向けて話し合いを行った。2025 年度も検討を継続していく。

評価に用いた指標（資料名）

- ・2024 年度チャイルドエデュケア研究所年報 22 号

### (3) 令和 7 年度以降の行動計画 (P)

- ・夏季保育セミナー

7/6（日）13:30～15:00@8 号館 保育科、教育保育学部卒後 1, 2 年の卒業生を参加対象者として開催する。テーマは「遊びを一緒に楽しもう！一明日から使える保育実践」。

- ・冬の講演会

12/21（日）13:30～15:30@832 さくら講堂 地域の教育・保育関係者を参加対象者とする。地域の教育・保育関係者と大学の連携を深める機会として位置づけ、参加者が主体的に学べる内容を実施する。

基調講演：柏倉秀克氏（副学長）「(仮) 共生社会を担う子どもの育ちのために」

シンポジウム：コーディネーター 柏倉秀克氏

話題提供者（2 名）上島遥氏（愛知学泉大学准教授）

未定 （名古屋市公立保育園保健師）

- ・年報の作成

23 号の発行。

- ・子育て支援室「さくらんぼ」の企画・運営

子育て交流会、支援室開放日を実施する。

保育科、教育保育学部の学生の交流会への参加を実施する。

「さくらんぼ通信」の配信及び配布を行う。

利用者への相談支援を行う。

- ・豊明市子育て支援センター「たけのこ」

交流会への学生の参加を実施する。

- ・桜花学園大学・名古屋短期大学附属幼稚園「くまりん」子育て支援室「さくらんぼ」の一元化・一体化  
引き続き、検討していく。

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 観光総合研究所 |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|
| <p><u>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li><b>1. 定例会議の開催</b><br/>4・6・8・10・12・2月に開催</li> <li><b>2. 第6回エアライン&amp;ツーリズムセミナーの開催（7月）</b><br/>観光関連企業（航空会社、旅行会社、ホテル、その他）の方による全体セミナーと個別ブースを設定することで、学生の観光関連情報の収集と将来のキャリアプランの設計に役立てる。</li> <li><b>3. ホスピタリティ講演会の開催（10月）</b><br/>全ての産業において求められるホスピタリティに関する講演会を開催することで、学生のキャリアプランの設計に役立てる。</li> <li><b>4. 第19回公開講座の開催（一般社会人向け）（11月）</b><br/>自治体、観光関連企業及び団体の方を対象として、観光まちづくりを基本テーマとして、地域の活性化活動の成功事例を紹介する。</li> <li><b>5. 有松史料調査保存会活動と発表会の開催（3月）</b><br/>年間を通して、有松の各家庭に残る貴重な史料を保存する活動を継続的にを行い、3月に成果発表会を有松の古民家で4日間開催する。</li> <li><b>6. 観光総合研究所事業報告書第19号の作成</b></li> <li><b>7. 愛知県観光協会、名古屋観光コンベンションビューロー、豊明市観光協会、有松地区との観光連携の推進（年間を通して）</b></li> </ol> |         |
| <p><u>(2) 令和6年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li><b>1. 定例会議の開催</b><br/>4/10、5/15、6/12、7/10、10/2、11/6、12/8、2/12の8回開催した</li> <li><b>2. 第6回エアライン&amp;ツーリズムセミナー（7月3日、13:30～17:30、832教室など）</b><br/>出展企業：航空会社2社、旅行会社3社、ホテル3社、空港会社1社、計9社<br/>参加学生：桜花学園大学39名、名古屋短期大学2名、計41名<br/>（課題）参加企業のバリエーションを増やすことと学生への告知の徹底。</li> <li><b>3. 第3回ホスピタリティ講演会（10月23日、13:10～14:40、832教室）</b><br/>講師：北折珠実氏（アエロメヒコ航空 日本地区営業本部長）<br/>参加学生：桜花学園大学20名、名古屋短期大学6名、計26名<br/>（課題）学生に関心のある講師の選択。</li> <li><b>4. 第19回公開講座（11月28日、13:30～16:30、ウインクあいち1002号室）</b><br/>講演者1：岩崎邦彦氏（静岡県立大学経営情報学部 教授）<br/>講演者2：白澤祐次氏（(株)阿智昼神観光局 代表取締役）</li> </ol>                                                                               |         |

参加者：一般 38 名、関係者 6 名、計 44 名

(課題) 参加者を 80 名～100 名まで集客する。

**5. 有松史料調査保存会活動と発表会**

年間を通して、調査活動は隔週の月曜日に 13 時～15 時まで 2 時間実施、1 月からは毎月曜日に 2 時間実施。発表会は 3 月 13 日～16 日まで 4 日間、10 時～16 時まで、有松の古民家・棚橋家住宅にて開催、入場者 436 名

(課題)：有松の各家庭に残る貴重な史料の調査活動が十分に進捗していない。

**6. 観光総合研究所事業報告書第 19 号の発行**

年度内（3 月）に発行した。次回分からは翌年度の 5 月に発行することとした。

**7. 各観光関連団体との連携活動は主に学生のボランティア活動を中心として実施した**

**(3) 令和 7 年度以降の行動計画 (P)**

1. 定例会議の開催（予定月：4 月・5 月・6 月・7 月・9 月・10 月・12 月・1 月）
2. 第 7 回エアライン&ツーリズムセミナーの開催（7 月予定）
3. 第 4 回ホスピタリティ講演会の開催（10 月予定）
4. 第 20 回公開講座の開催（11 月予定）
5. 有松史料調査保存活動と発表会の開催（発表会は 3 月予定）
6. 観光総合研究所事業報告書第 20 号の発行（発行月は翌年度の 5 月）
7. 愛知県観光協会、名古屋観光コンベンションビューロー、豊明市観光協会、刈谷市観光協会などとの連携活動の実施
8. 観光関連の調査及び研究活動

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   | 国際交流支援センター |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------|
| <p><b><u>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</u></b></p> <p>P（計画）</p> <p>1：交換留学生受け入れの準備（前期）と支援<br/> 2：交換留学生の受け入れ準備（後期）と支援<br/> 3：各学科留学支援—危機管理説明<br/> 4：留学支援全般—JASSO 申請（派遣・受入れ）<br/> 5：新たな MOU 交換の支援<br/> 6：短期留学プログラムの運営と支援</p> <p>D（実行）</p> <p>1：前期には韓国（清州大学校）から 3 名の交換留学生を迎えた。入管への手続き・アパート手配を早い段階で行なった。また、入国後の各種支援を行なった。<br/> 2：後期には韓国から 3 名（清州大学校から 2 名・順天郷大学校から 1 名）の交換留学生を迎えた。入管への手続き・アパート手配を早い段階で行なった。また、入国後の各種支援を行なった。<br/> 3：年間で 9 回（のべ人数 119 名）、海外留学前の危機管理説明会を実施した。<br/> 4：JASSO の申請に際して、11 プログラム（4 学科、1 専攻科）を支援した。<br/> 5：学芸学部・国際学部（2024 年度開設）を中心とした受け入れ体制で一部 MOU 更新準備、後者のダブル・ディグリー協定準備を開始した。<br/> 6：各学科主催の各種派遣・受入れプログラムの準備を支援した。夏季 Japan Study Programme は英国から 1 名、韓国から 15 名の協定校留学生参加により 4 週間・2 週間プログラムを全学的な支援のもと初めて実施した。<br/> 7：学長依頼により、各学科の海外出張関連の予算案をセンターとしてまとめ、重複等の有無を確認した。</p> <p><b><u>(2) 令和 6 年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</u></b></p> <p>C（評価）</p> <p>1：前期交換留学生の入国・入国後手続き・滞在・帰国とすべて順調に作業を終えることができた。当該留学生が帰国時に N2 級に合格しており、学習面でのサポートも十分できた。<br/> 2：後期交換留学生の入国・入国後手続き・滞在・帰国とすべて順調に作業を終えることができた。留学前に日本語能力試験（以下、JLPT）N1 級取得済みの学生を除き、国内では JPT、帰国後に JLPT 受験により N2 級に合格しており、学習面のサポートが十分できた。</p> |            |

- 3 : 要請があったすべてのプログラムについて、各学科の担当者と協力してスムーズに実施できた。
- 4 : 申請した 11 プログラムのうち、9 プログラム（派遣）が採択、2 プログラム（受入）は不採択という結果であった。採択率は例年と同じレベルを維持できたと考える。
- 5 : 学芸学部・国際学部の協力のもと、一部更新作業が進められ、交換待ちとなっている。また、国際学部のダブル・ディグリー取得のための MOU 準備も進められている。
- 6 : 各学科主催のプログラム（派遣・受入）いずれも滞りなく運営された。夏季 Japan Study Programme は初めての受入に際して協定校の依頼もあり行事を密に組んだが、熱暑での留学生たちの消耗も激しく、日程を組む際の配慮を求められた。日本語・文化体験については満足度が高く、キャンパス各学科の学生 40 名がメンターとして関わることで交流という重要な目的を果たすことができた。

#### A（改善）

- 1 : 2024 年度実績に関しては、特に改善項目はないと判断する。
- 2 : JLPT の後期（12 月上旬実施）の申込期間が来日前に終了していることは昨年度と同様であったため、10 月申込が可能な JPT 受験（12 月下旬大阪会場）を促すことができた。
- 3 : 2024 年度実績に関しては、特に改善事項はないと判断する。
- 4 : 高い採択率を維持できている派遣プログラムであるが、該当学部の一つ学芸学部学生数の減少に伴い、派遣枠を残さざるを得ないプログラムが複数残る結果となった。国際学部における申請者を育てる準備が必要である。また、受入プログラムについては採択されるような入念な申請準備が引き続き必要である。また、事前・研修時・事後に渡り、大変煩雑な作業が要求されるため、学校法人のご理解のもと国際交流支援センターの事務局の体制強化をお願いしたい。
- 5 : 2024 年度実績に関しては特に改善事項はないと判断する。
- 6 : 各学科主催のプログラム（派遣・受入）については特に改善事項はないと判断する。夏季 Japan Study Programme については、次年度は熱暑期間であることを派遣大学にもご理解いただき、余裕のある日程を組むことを計画している。
- 7 : 2024 年度実績に関しては特に改善事項はないと判断する。

評価に用いた指標（資料名）

・国際交流支援センター2024 年度教授会各月報告

#### (3) 令和 7 年度以降の行動計画 (P)

- 1 : 交換留学生受け入れの準備（前期）と支援を計画的に行う。
- 2 : 交換留学生の受け入れ準備（後期）と支援を計画的に行う。

- 3：各学科留学支援として、危機管理説明を定期的に実施する。
- 4：JASSO 申請（派遣・受入）の採択に必要な要素を検討し、採択数を増やす。
- 5：新たな MOU 交換の支援を行う。
- 6：短期留学プログラムの運営を関係学科・事務局と協力して行う。
- 7：留学に伴う海外出張予算案について確認を行う。
- 8：外国籍留学生の把握と支援を行う。

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 情報総合センター |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|
| <p><b><u>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</u></b></p> <p><b>A 学術情報部門</b></p> <p>(1) 利用者ポータルサイトの提供や学務システムとの連携を行い、より利用しやすいように改善する。</p> <p><b>B 情報基盤部門</b></p> <p>(1) 学生のBYOD 端末のトラブル対応の状況把握<br/>MAC機及びWINDOWS 機に対して機種別に発生する様々なトラブルに正しく対応できるよう対応状況を集約する。</p> <p>(2) M365等運用システムの学習会の開催<br/>M365等の学内で運用しているシステムについて、教職員を対象に運用方針や基本操作を理解し、適切に使用できるように学習会を開催する</p> <p>(3) SINET6接続により10Gbpsの活用<br/>各建屋間の10Gbps接続が完了したが、研究室内・事務所内の1Gbps未満のスイッチをリプレースするために、現状把握をする。</p> |          |
| <p><b><u>(2) 令和6年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</u></b></p> <p><b>B 情報基盤部門</b></p> <p>(1) 学生のBYOD 端末のトラブル対応<br/>MAC機及びWINDOWS機ともに頻度の高いトラブルについては、概ね把握ができた。</p> <p>(2) ICT学習会の開催<br/>AI技術、ChatGPT について概要を解説し学生への応用方法を伝達できた。教職員向けのICT学習会の内容を改める。</p> <p>(3) SINET6接続により10Gbpsの活用<br/>接続の点検できていない箇所があるため継続的に確認する。</p>                                                                                                                                                 |          |
| <p><b><u>(3) 令和7年度以降の行動計画 (P)</u></b></p> <p><b>A 学術情報部門</b></p> <p>(1) 研究倫理及び著作権に関する講習の充実を図る。</p> <p><b>B 情報基盤部門</b></p> <p>(1) 学内ネットワーク利用に関する規程、ガイドラインの整備を行う。</p> <p>(2) 学内ネットワーク機器の更新<br/>サービス、保守が切れている機器をチェックし順次、更新を行う。</p> <p>(3) BYOD端末機器のトラブル対応</p>                                                                                                                                                                                             |          |

MAC機及びWINDOWS 機に対して機種別に発生する様々なトラブルに正しく対応できるよう対応状況を集約する。

- (4) 学内に設置しているサーバについて、提供機能及び保守を確認し、サーバの集約化及び障害対応のための冗長化を検討する。これに伴い提供サービスの変更などに対応できるように講習会等を実施する。
- (5) 学内フロア間のスイッチをSINET6接続（10 Gbps）に見合ったものにするため、置き換えてネットワーク速度を安定稼働させる。

桜花学園大学 自己点検評価書（評価単位版）

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | 教務委員会 |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| 2021-2025 年度中期計画に則り、下記①～⑨の下線部の目標を教務委員会・共通教育委員会活動を推進した（以下、各々の目標に対応した結果を記載）。                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |       |
| <b><u>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</u></b>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |       |
| ① <u>アクセシビリティ推進委員会と協働した TA 制度の活用、SA 制度の確立と本格導入の検討（項目 2-2）</u> ：前年度試行のガイドラインに基づく SA 制度及びアクセシビリティ推進委員会との協議を経て、「桜花学園大学スチューデント・アシスタント（SA）規程」を制定した。本年度末には該当学生の推薦が検討されており、次年度 4 月より活用の予定である。                                                                                                                                                                                      |       |
| ② <u>学修成果の指標とカリキュラムマップ・コモンルーブリックの適切性検証（項目 2-2）</u> ：各学科の新カリキュラム、また前年度アセスメント活動にて浮き彫りとなった課題を踏まえ、昨年度に引き続き 3 ポリシーに基づく学修成果の指標とカリキュラムマップ、ルーブリックをもとにアセスメントプランに沿って学修効果を検証した。                                                                                                                                                                                                        |       |
| ③ <u>学修成果の指標とルーブリックを踏まえた授業評価アンケートを活用した桜花学履修生の理解度検証（項目 2-5）、および、桜花学の理解度および改訂学修目標の理解度検証（項目 3-2）</u> ：本年度からの共学化に際し、年度当初に実施した「非常勤講師打ち合わせ会」において、花びらごとの定義や科目名・授業内容の適切性等について、非常勤講師を含めた授業担当者にて共有した。また、コモンルーブリックを見直し、共学化に合わせて微修正を行った。加えて、副学長講話に関しては、男女共学化に伴い建学の精神を中心にご講話いただくよう配慮した。                                                                                                  |       |
| ④ <u>情報総合センターとの組織的連携の在り方の検討（項目 2-5）</u> ：LMS を利用した遠隔授業による科目の設定・実施、数理・データサイエンス・AI 教育プログラム（文部科学省認定制度）の検討、実習に伴う土曜開講授業に係る遠隔授業の検討など、学修の質や量を担保しながら、教育の質の一層の向上及び実習や障害等に阻害されない学修機会の確保等、学修支援の充実に向けて様々な授業運営の枠組みを検討した。                                                                                                                                                                 |       |
| ⑤ <u>多様な学生を包摂し得る支援についてアクセシビリティ推進委員会・学生委員会との組織的連携の在り方の検討（項目 3-1、項目 3-2、項目 3-3）</u> ：本年度よりアクセシビリティ推進委員会の構成員に教務部課長が加わり、障害のある学生への支援体制を充実し、遠隔授業の柔軟かつスピーディな提供、障害学生支援に関する方針（ガイドライン）の改正等全学的なアクセス確保の点検など、学修環境の更なる整備に努めた。また、SA 制度を整備し、多様な学生へ提供する複層的な支援体制の構築に努めた。中途退学、休学及び留年が予想される学生への対応については、前年度に引き続き指導対象学生を履修規程より拡充し、教務委員会・各学科で早期に指導できるよう配慮した。課外活動の成果については、IR 室が引き続き学生アンケートを実施し、学生生活 |       |

の充実、質保証について全学的・組織的に検証した。

- ⑥ 3 ポリシーに基づく学修成果の指標とルーブリックの運用検証（項目 3-1、項目 3-3）：本年度から始まった共学化及び各学科の新カリキュラム、また前年度アセスメント活動にて浮き彫りとなった課題を踏まえ、昨年度に引き続き、3 ポリシーに基づく学修成果の指標とカリキュラムマップ、ルーブリックをもとにアセスメントプランに沿って教育効果・学修効果を検証した。
- ⑦ CAP 制度の運用による学修成果の検証（項目 3-2）：前年度に引き続き、GPA 値の推移による CAP 制度の適切性の検証を行った。
- ⑧ 授業評価アンケート及び授業改善アンケートの検討（項目 3-2）：授業中間アンケートの全学実施、FD 委員会による授業アンケート全体集計の経年的考察、また、本年度から本格的に施行された【Ohka Good Practice(OGP)】における選定資料としての活用等、内部質保証や授業改善に資する取組を継続した。
- ⑨ 教育改善につながるディプロマ・サプリメントの内容や活用等の検証（項目 3-3）：本年度の発行に際し、前年度の本格実施を踏まえ、プロセスや内容を見直して厳正な資料の作成に努めた。

## (2) 令和 6 年度末点検結果と継続課題 (C) (A)

- ① 策定後、2024 年度末には該当学生の推薦が検討されており、次年度 4 月より活用の予定である。今後も継続して SA 活用の効果を検証していく必要がある。
- ② アセスメント結果から、シラバスの内容整備や第三者チェック、授業アンケートの回答率向上の検討等を行ったが、学修成果の指標の浸透度、ルーブリックの浸透度、分析の基盤となる授業アンケート回答率等、依然課題が残る。
- ③ 従来継続して取り組んできた 1 年次基礎演習における副学長による建学の精神講話、また年間の取組を検証するアセスメント活動（学修成果の指標及びコモンルーブリックの理解度や評価の適切性の分析・考察）は共学化を踏まえて実施した結果、学修成果の指標及びコモンルーブリックを理解度の検証や、評価の適切性については、2023 年度と同様に、概ね浸透・適切であることが確認された。加えて、男女共学化に伴い桜花学の科目名称変更等を行ったため、授業に関しては特段要望・課題も挙がらず、円滑に運営できたと判断できる。
- ④ 実習に伴う土曜開講授業に係る遠隔授業の検討などは、2025 年度が初の試みであるため、情報総合センターと連携しながら学修機会の確保や学修支援の適切性を継続的に確認していく必要がある。また、ネットワークに関する利便性に関しては、2024 年度学生会会要求にも依然として見られたため、向上していく必要がある。
- ⑤ 中途退学、休学及び留年が予想される学生への対応については、GPA1.5 未満の学生の状況の早期指導に加え、学生指導状況の追跡報告を行ったことで、委員会内の共有が迅速にできたことは大きかった。また、アクセシビリティ推進委員会に教務部課長が

構成員として加わったことで、障がいのある学生への学修支援・学修環境の整備を教務委員会内でも共有できたことは有益であった。

- ⑥ シラバスの内容整備や第三者チェック、授業アンケートの回答率向上の検討等を行ったが、学修成果の指標の浸透度、ルーブリックの浸透度、分析の基盤となる授業アンケート回答率等、依然課題が残る。年度末の各学科研修会において上記の取組を共有・検証した後に、大学評価委員会において全学的に点検する予定である。また、より厳正な内部質保証・教育の質保証に資する取組として、共通教育科目及び各学科専門教育科目の主要授業科目の設定、教職課程自己点検の外部審査受審・指定保育士養成施設の指導調査受審（保育学部のみ）に取り組んだ。
- ⑦ 結果は前年度と同様、学年や成績グループごとに差異が見られるものの、GPA 高・中・低各群の GPA 値に明らかな低下は見られず、CAP 制は学修成果のために概ね適切に機能していると言える。
- ⑧ FD 委員会とも議論を共有し、学生の回答率向上の検討、授業改善アンケート提出率向上に向けた呼びかけ強化、年度末の各学科研修会での共有等を行ったが、回答率・提出率の上昇や授業改善方法の組織的取組には依然課題が残る。
- ⑨ 本格実施から 2 年目を迎えたが、当該資料発行が本来の目的である「学修者主体の教育の実現（学生が自らの学修成果を自覚し説明できるようにすること、複数の情報を組み合わせることで多角的に学修成果・教育成果を把握・可視化することによる教育改善）」に寄与できているかについて効果検証する必要がある。

#### 評価に用いた指標（資料名）

- ① 「桜花学園大学スチューデント・アシスタント（SA）規程」「2024 年度 2 月度教務委員会議事録」
- ② 「2024 年度 6 月度教務委員会議事録」（授業アンケートの回答率を高める方法に関する意見集約について）「2025 年度シラバス作成要領」「桜花学園大学教務委員会アセスメント活動報告書 2024 年度」
- ③ 「桜花学非常勤講師打合せ会資料」「桜花学園の歴史と建学の精神」「桜花学園の歴史と建学の精神に関する学生レポート」「2024 年度桜花学園大学教務委員会アセスメント活動報告書」
- ④ 「遠隔授業申請資料」「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度申請資料」「土曜開講授業に係る遠隔授業の検討資料」「2024 年度学生会要求」
- ⑤ 「アクセシビリティ推進委員会規程」「障害学生支援に関する方針（ガイドライン）」「2024 年度 10 月度・3 月度教務委員会議事録」（GPA1.5 未満（1.4 以下）の学生について）「2024 年度 1 月度教務委員会議事録」（SA 制度の検討について）「学生アンケート」
- ⑥ 「2024 年度 6 月度教務委員会議事録」（授業アンケートの回答率を高める方法に関す

る意見集約について)「2025 年度シラバス作成要領」「2024 年度桜花学園大学教務委員会アセスメント活動報告書」

- ⑦ 「2024 年度桜花学園大学教務委員会アセスメント活動報告書」
- ⑧ 「(保育学部) 学生との共同 FD 活動として授業中間アンケートの実施」「(学芸/国際学部) 授業中間アンケート」「2024 年度桜花学園大学 FD 委員会報告書」
- ⑨ 「ディプロマ・サプリメント様式 (各学科)」「2024 年度 12 月度教務委員会議事録」(ディプロマ・サプリメントについて)

### **(3) 令和 7 年度以降の行動計画 (P)**

- ① 次年度はより一層の学修支援の充実を目指し、当該規程にもとづく SA 活用の効果を検証し制度の機能の向上、また、TA 制度との連携及び多様な学生への支援を念頭に、大学院及びアクセシビリティ推進委員会との協働を継続する。
- ② 次年度も課題の対応を検討しつつ本取組を実施し、学修成果の指標とカリキュラムマップ、及びコモンルーブリックの適切性を引き続き検証する。
- ③ 次年度は、本取組を継続的に実施するとともに取組内容を見直し、教育内容・方法及び学修指導等の改善を図る。
- ④ ネットワークに関する利便性の向上に関して、情報総合センターとの更なる連携・協働を推進していく。
- ⑤ 次年度もアクセシビリティ推進委員会・学生委員会と更なる連携・協働を推進しながら、多様な学生への個別具体的な学修支援を継続していく。
- ⑥ 次年度も、課題の対応を検討しつつ本取組を実施し、教育内容・方法及び学修指導等の改善に資する仕組みの検証を継続する。
- ⑦ 厳正な成績評価の基盤である単位制度の実質を保ち、かつ免許・資格取得の機会を担保し得る教育課程改革(多元的な評価尺度や科目の精選・統合等)のため、次年度も本年度の取り組みを継続する。
- ⑧ 実効性のあるアンケートの実施を目標に、次年度も引き続き FD 委員会や学科等関係各所との連携をすすめ、教授方法の工夫・開発と効果的な実施のための組織的取組を検討する。
- ⑨ 次年度も本取組を継続し、効果測定について検討する。

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | FD 委員会 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|
| <p><b>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 外部講師による FD 研修会の開催と最新課題の共有</li> <li>② 「PROG テスト」(保育学部)、社会人基礎力シート(国際学部)の実施による課題抽出と授業改善への具体的展開</li> <li>③ 各学部間における相互授業参観の実施と OGP の選出</li> <li>④ 学生との共同 FD 活動(中間授業評価アンケート)の実施</li> <li>⑤ 期末授業評価アンケートの実施率の向上の取り組み</li> <li>⑥ FD 関連出張(大学教育研究フォーラム)を通じた最新課題を報告・共有</li> </ul> <p><b>(2) 令和 6 年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①FD・SD 研修会 <p>本学も男女共学化、新学部設置など、改革の真ただ中にあり学ぶべき点が多かったが、講演者の大学と規模が異なるのであまり参考にならないという意見もあった。また研修会の開催方法(FD と SD を分けるか、講演会形式 or ワークショップ形式 等)については検討が必要である。</p> </li> <li>②「PROG テスト」(保育学部) 社会人基礎力シート(国際学部) <p>今年度の PROG テストの実施を踏まえて、ア) 学生に対する受験後指導のあり方の検討、イ) PROG テストの結果を保育学部における教育にどのように生かしていくかの検討、という 2 点の課題がある。特に、PROG テストの結果を学生指導に効果的に活用することと、PROG テストの結果だけが独り歩きするのではなく、実習データや GPA などと結びつけられたデータとして生かしていくことを継続課題としたい。</p> <p>国際学部の社会人基礎力測定は、2020 年度・2021 年度の入学生を中心に自己査定をしたデータを分析し 4 年間の変化を明らかにしたが、特に 2021 年度の入学生は、3 年間の平均点が着実に伸びている。ストレスコントロール力・規律性・創造力や発信力などの面で、時間の経過とともに着実に点数が上昇している。</p> </li> <li>③授業相互参観・OGP 選出 <p>保育学科では 21 件、国際教養こども学科では 11 件、国際学科は 5 件の参観があり、昨年よりも増加した。これは相互授業参観に対する教員の意識向上と FD 委員からの呼びかけが大きな要因である。また本年度の OGP の選出の観点は、＜C：環境(学習環境)・教材・ICT＞であり、5 つの授業が OGP に推薦され、学生による授業アンケートも参考にし、最も高い評価を得た授業を OGP として選出した。</p> </li> <li>④学生との共同 FD 活動 <p>保育学部では授業中間アンケートを実施した。ゼミ毎でまとめた学生の声を要望と感謝の 2 面から個々の授業担当者にフィードバックした。教員は学生の声を参考に、</p> </li> </ul> |        |

それ以降の授業で説明と改善を目指した。徐々に定着しつつあるが、来年度からは、学生自身の授業に向かう意識や姿勢なども振り返らせる機会も必要である。国際部においては、12月の段階で全学年の学生に講義と施設に関するアンケートを実施し、1月の学部フォーラムにて、各担当教員から回答がなされ、さらに質疑応答に基づく議論が展開された。これによって、講義内容と教育環境に関する改善を目指した。

⑤期末授業評価アンケートの実施率の向上の取り組み

学生が意欲的に学び、それに対して質問ができるような機会や工夫が教員から提供されていることが確認された。しかしながら授業アンケートに対する回答率が低いことは課題として残っている。教務委員会と連携しながら実施方法の工夫や設問数の検討など、回答率を上げ、より実効性のある授業アンケートを行っていく必要がある。

⑥FD 関連出張（大学教育研究フォーラム）を通じた最新課題を報告・共有

委員長が2024年8月31日にIRフォーラム（主催：公益財団法人 大学コンソーシアム京都株式会社リアセック）にオンラインに参加し、FD委員内で共有した。多くの学内データを集め、それから教学IRを展開していくシステムの構築がポイントであると確認した。

○評価に用いた指標（資料名）

- ・2024年度FD委員会報告書
- ・FDSD研修会事後アンケート
- ・授業相互参観報告書
- ・授業中間アンケート、授業アンケート
- ・PROGテスト（保育学部）、社会人基礎力シート結果（国際学部）

(3) 令和7年度以降の行動計画（P）

- ・授業相互参観の実施率を向上させ、授業を学び合う機会を増やすこと。
- ・中間アンケート、授業アンケートともに回答率を上げ、授業改善ための効果を高めること。
- ・そのためのアンケートの内容、質問項目数、アンケートの実施方法などの工夫をすること。
- ・授業改善のために、その他の有効な方法についても模索を続けること。
- ・PROGテストの活用方法について交流しあうこと。
- ・FD・SD研修として相応しい内容を企画すること。

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 学生委員会 |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| <p><b>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</b></p> <p><b>令和 6 年度の目標 (P)</b></p> <p><b>1. キャリア支援</b></p> <p>1) 就職支援に関わる組織の連携強化を図る</p> <p>2) 学生のニーズに沿った支援内容を提供する</p> <p>3) 就職・進路先の実態を把握し、情報分析を活かしてサポートする体制を構築する</p> <p>4) 充実したインターンシップ先の開拓と、その援体制を強化する</p> <p>5) 教育・保育職支援センターの支援が学生のニーズに沿っているか内容を検討する</p> <p><b>2. 学生サービス: 学生生活支援</b></p> <p>1) 支援が必要な学生および必要であろう学生への適切なサポート体制を構築する</p> <p>2) ハラスメント防止に対する取り組みを充実させる</p> <p><b>3. 学生サービス: 経済的支援</b></p> <p>1) 奨学金の教育的効果を調査し、検証する。学修奨励賞への取組みを高める</p> <p>2) 内外奨学金を充実させ、あらゆる方法で情報提供の充実を図る</p> <p><b>4. 学生サービス: 課外活動支援</b></p> <p>1) 学生の帰属意識の向上を目指し、授業以外での活動支援の幅を広げる</p> <p>2) 学生会と大学の共同で、本学の次世代につながる有形無形の「学生諸活動」へのサポートを構築する</p> <p>3) ボランティア活動先を増やしボランティア活動の充実を図る</p> <p><b>令和 6 年度の活動内容 (D)</b></p> <p><b>1. キャリア支援充実のための具体的対応</b></p> <p>保育学部就職委員会の会議（月例）には学生課職員が同席し、また教育保育職支援センターの支援情報は学生課と保育学部で共有されてた。このように就職支援に関わる部署が定期的に詳細な情報を共有するシステムが構築されている。さらに卒業生の実態調査のため園訪問を実施し、重ねて web アンケートを実施した。学芸学部は学科内での就職・キャリア教育が学年ごとに実施され「企業研究」の授業では学部講師招聘、セミナーの開催で最新情報提供と就職支援充実を図った。インターンシップ先は春夏合計して 2023 年度 49 から 58 企業（団体）に増加した。</p> <p><b>2. 学生サービス: 学生生活支援の具体的対応</b></p> <p>2023 年度新設のアクセシビリティ推進委員会では、特別支援部会との連携により障害学生への支援充実体制を強化してきた。同時に SA（スチューデント・アシスト）制度のガイドラインは試験的な施行により、障害学生への支援を積み上げようと試みた。具体的には、学芸学部 1 年生の視覚障害学生について、その学生の現状を共有し、年度末会議では</p> |       |

SA 支援を残しつつ、ピアサポートの充実と彼らへの支援のあり方を検討した。また 2025 年度入学予定の聴覚障害学生に対する入学前面談を実施し、入学後のサポート体制を強化した。

さらに学生大会での学生会要求に対して、食事系キッチンカーの充実やトイレの改善を順次行い現場に対応してきた。またハラスメント防止対策では、「ハラスメント防止・対策委員会」で名古屋短期大学と共に必要に応じて連携協力体制を整えた。リーフレット及びハラスメント防止ガイドライン（冊子）を作成・配布。教職員向け研修会も例年通り開催した。

### 3. 学生サービス：経済的支援の具体的対応

日本学生支援機構の給付型および貸与型（第 1 種奨学金・第 2 種奨学金）の受給者は、本年度は合計で 37.5%であり例年通りであった。採用決定後は、学生の手続きが怠らないようガイダンスの回数を 2 回から 3 回に増やし、その都度事前に個々人のメールでガイダンス参加の呼びかけを実施。ガイダンス欠席学生には電話やメールで連絡し個別対応で手続きの継続を支援した。その他の奨学金も掲示板での告知およびゼミ担当教員を通して学生に周知した。学修奨励賞（令和 6 年度）は保育学部保育学科 2 名、国際教養こども学科 10 名、学芸学部 2 名がエントリーし、その合計額は 150,000 円であった。

### 4. 学生サービス：課外活動支援

学生大会（春秋）は対面で実施し、特に春季大会を学生の授業・実習予定を考慮し 6 月に開催した。また出欠席手続きに Web を利用するなどの工夫が定着した。リーダーズキャンプでは、内容の充実を図りキャンプの方法を改善すると共に、委員会等の引継を Web 化した。課外活動は平日の昼休みや放課後に実施され、特に参加者が多いダンス系サークルは 6 号館と新校舎のリズム室を使用し、トレーニングルームはスポーツ系部活動所属者が活用した。

## (2) 令和 6 年度末点検結果と継続課題 (C) (A)

### 1. キャリア支援のチェックと今後の課題

就職活動の早期化も関係し、教育保育職支援センターでの面談（集団）練習時期がばらついたので運営の方法を再検討する必要がある。また、全ての職種において、一部の学生は限られた情報で就職を決定する動きが見られた。よってより多くの情報を提供するだけでなく、就職先を比較検討する時間、手間を惜しまない学生指導が更に必要である。

### 2. 学生サービス：学生生活支援のチェックと今後の課題

視覚障害学生に対しては、教員が現状を常に把握し、学生は友人としてサポートを継続している。障害学生が遠慮なく要望が言えるような人間関係の構築ができたと言える。アクセシビリティ推進委員会ではそのような現状を共有し、SA 制度の進め方については現状に即した制度のあり方を考えていくことが必要であると確認した。また特別支援を必要とする学生に対しての学修支援体制をさらに迅速に実施するため、2024 年度より教務

部長・課長がアクセシビリティ推進委員会の構成員になったことでよりスムーズに会議が運営されるようになった。

### 3. 学生サービス：経済的支援のチェックと今後の課題

学外からの奨学金（給付・貸与）状況は以下の通りである。

学外からの奨学金状況（令和6年（2024）年度実績）

| 奨学金名称       | 給付・貸与別 | 支給対象学生数（人） | 在籍学生総数（人） | 在籍学生数と比率（%） | 月額支給総額（円） | 1件当たりの月額支給額（円） |
|-------------|--------|------------|-----------|-------------|-----------|----------------|
| 日本学生支援機構    | 給付     | 64         | 710       | 9.1         | 1,919,900 | 29,998         |
| 日本学生支援機構第一種 | 貸与     | 99         | 710       | 13.9        | 3,546,300 | 42,727         |
| 日本学生支援機構第二種 | 貸与     | 129        | 710       | 18.2        | 8,370,000 | 72,155         |

全学生数における給付・貸与率は前年度と大きな差はなかったが、学生の奨学金に対する意識の低下が加速していると思われる。具体的にはガイダンスに出席しない、奨学金の用途を把握していない、学生課の呼び出しに無反応などである。対策は活動内容に示す通りであるが、最終的には20人～30人に対して個別の呼び出しと指導を実施している。このような現状を踏まえ、奨学金を受給することの意味や責任について学生に認識させるガイダンス内容が必要である。またケースによっては保護者との連携も必要である。

### 3. 学生サービス：課外活動支援のチェックと今後の課題

課外活動に積極的に参加している学生がいる一方で登録はしても積極的に参加できなかった学生もあり、参加率は過去の全盛期よりも低迷している状態にある。委員会等の二者懇談会の充実やスポーツ系サークルでは教職員との交流試合などサポート体制を強化してきたが、2024年度より男子学生が入学することを1つの転機とし、多様な活動への取組の推進と新たな支援体制を整えることは必須である。ボランティア活動は各学科の特徴を踏まえ、学科ごとにさらに参加機会を増やす工夫が必要である。

評価に用いた指標（資料名）

エビデンス（データ編）

【表】就職相談室等の状況

【表】就職の状況（過去3年間）

【表】卒業後の進路先の状況（訪問・ウェブアンケート）

【表】IR室満足度調査

【表】学生相談室、医務室の利用状況

【表】2024年度学生の課外活動への支援状況

エビデンス（資料編）

【資料】桜花学園大学保育学部就職委員会議事録

【資料】 令和 6 年度インターンシップ受入一覧  
【資料】 2024 年度桜花学園大学連合学生委員会議事録  
【資料】 2024 年度連合アクセシビリティ推進委員会議事録  
【資料】 桜花学園大学スチューデントアシスタント（SA）制度に関するガイドライン  
【資料】 桜花学園大学学修奨励賞に関する規程、学修奨励賞内規  
【資料】 2024 年度連合ハラスメント防止対策委員会議事録  
【資料】 桜花学園大学学修奨励賞に関する規程、学修奨励賞内規  
【資料】 令和 6 年（2024）学生アンケート  
【資料】 2024 年度連合ハラスメント防止対策研修会資料  
【資料】 2024 年度連合ハラスメント防止対策委員会議事録  
【資料】 ハラスメント防止ガイド、ハラスメント防止ガイドライン

### (3) 令和 7 年度以降の行動計画（P）

- 1) 個々の学生ニーズに合わせた就職支援方法を素早く提供するため各機関の連携と情報共有を徹底する。卒業生のデータ収集と活用法の検討。
- 2) 特別支援が必要な学生への合理的配慮の妥当性について検討し、適切な対応ができる素地を固める。
- 3) 奨学金の貸与・新給付への理解を深める教育的支援のあり方の検討。
- 4) 多様な課外活動の把握と支援方法の検討。課外活動状況の発信方法の工夫。

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | 入試委員会・入試広報課 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| <p><b><u>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</u></b></p> <p>(P) ミッション：入学者定員の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①OC、OLCへの参加促進</li> <li>②選抜方法の見直し</li> <li>③指定校の見直しと拡充</li> <li>④広報活動の拡充（SNS、HP、高校訪問、検索など）</li> <li>⑤桜高との高大連携強化</li> </ul> <p>(D)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①SNS、HP、DM、資料請求対応、高校訪問、ガイダンス告知</li> <li>②一般V設定（国際）、選抜追加（国際）、さくら選抜日程・回数有変更（名保）</li> <li>③指定校拡充：通信制高校（国際）、県外指定校（国こ）、専攻科（名保）</li> <li>④各学科がオリジナリティを出した活動を実施</li> <li>⑤学園内推薦入学者の入学金全額免除</li> </ul> <p><b><u>(2) 令和6年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</u></b></p> <p>(C) 入学者定員確保について、3学科中1学科の充足に留まった。</p> <p>ただし、保育系学科の定員割れではあるが、社会的な逆風の状況下での入学者数（教育保育100名オーバー）は、一定の評価をすべきと考える。再度ではあるが、定員までの人数差を埋める取り組みを来年度以降の課題とする。</p> <p>前半入試決着、保育離れの傾向は、今後も変わらないと想定されるため、OC・OLC参加者確保、参加者の受験率・入学率の向上を目指す。桜大入学のメリット、優位性を全体最適ではなく、個別最適での対応を各学科で実施していくことが肝要。</p> <p>(A) 各学科のオリジナル性を重視しつつ、入試委員会として、一定の方針を協議、提案を模索した。</p> <p>○評価に用いた指標（資料名）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・OC、OLC参加学生数一覧</li> <li>・SNSフォロワー数</li> </ul> <p><b><u>(3) 令和7年度以降の行動計画 (P)</u></b></p> <p>(P) ミッション：入学者定員の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「2026入試戦略について」を作成 その内容に沿った取り組みを実施する</li> <li>・KPIを作成し連合入試委員会で確認</li> <li>・SWOTシートを作成し、各学科にて取り組み検討と修正を実施</li> </ul> |             |

- ・ 指定校の見直しを実施
- ・ 高大連携において、総合的な探究の時間の大学単位認定を検討実施

| 評価単位名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | 事務局 |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| <p><b><u>(1) 今年度の目標と活動内容 (P) (D)</u></b></p> <p>(1) (P)</p> <p>①SD</p> <p>令和 4（2022）年度初めて FD と SD 合同の FSD 研修会を大学スタッフとして「授業マネジメントをどう理解し、実践するか」をテーマに実施した。今年度も FSD として適切なテーマで研修会を実施する。</p> <p>②施設</p> <p>学内のバリアフリーを含めた安全対策をさらに進める。</p> <p>③研究支援</p> <p>科研の新規採択件数は 2022 年度 2 件、2023 年度 2 件、2024 年度 1 件である状況から申請数増加を促進したい。</p> <p>(2) (D)</p> <p>①SD</p> <p>令和 6（2024）年度の FSD 研修会は男女共学化後に順調な成長を遂げた京都橘大学の副学長を講師に招き「進化し続けるキャンパス、困難な時代の突破力とは」というテーマで実施した。</p> <p>②施設</p> <p>図書館のエアコン室外機の更新、全盲学生の要望により 7 号館横の通称おみくじ階段に手すりを設置した。</p> <p>③研究支援</p> <p>申請時のチェックなど申請支援を重点に行った。</p> |     |
| <p><b><u>(2) 令和 6 年度末点検結果と継続課題 (C) (A)</u></b></p> <p>(1) (C)</p> <p>①SD</p> <p>FSD として 3 回継続して実施し、教職員の約 8 割が参加した。</p> <p>②施設</p> <p>学内のバリアフリー化は整いつつあるが、未整備の棟や段差の解消などについて継続的に行いたい。</p> <p>③研究支援</p> <p>2023 年度科研採択（研究中を含む）は桜大 研究代表者 10 件 直接・間接経費 8,320,000 円 研究分担者 4 件 直接・間接経費 65,000 円 名短大 研究代表者 3 件 直接・間接経費 910,000 円 研究分担者 5 件 直接・間接経費 663,000 円 であった。</p>                                                                                                                                                                                                         |     |

(2) (A)

①SD

参加した教職員の 67%が「有益」29%が「まあまあ有益」とアンケートに回答しており、研修の成果が認められた。

②施設

エアコンなど施設の老朽化に対応した更新を計画している。

③研究支援

引続き研究支援を行う。

評価に用いた指標（資料名）

- ・ 2024 年度 桜花学園大学・名古屋短期大学 FD・SD 研修会 参加者名簿
- ・ 2024 年度 桜花学園大学 名古屋短期大学 科学研究費受入一覧

(3) 令和 7 年度以降の行動計画 (P)

①SD

今回の FSD 研修会では「AI の活用」をテーマとして、実務的な業務改善を指向する。

②施設

バリアフリー化を含め、学内の安全対策を検討・実施する。

男子学生が増えていくことから学内男性用施設等（トイレ・クラブ室・運動施設）について、学生の要望を踏まえて整備計画を図る。

③研究支援

引き続き科研等の申請支援、報告書作成支援を行う。

## あとがき

本学は令和 5(2023) 年度まで毎年、公益財団法人日本高等教育評価機構の評価基準に基づいた自己点検評価を実施し、その結果を自己点検評価書として製本してまいりました。日本高等教育評価機構の評価基準を用いることによって、本学の教育研究活動や組織運営、施設設備、財務等の状況を多角的かつ横断的に評価することが可能となり、本学の自己点検評価において重要な役割を果たしてまいりました。その一方で、日本高等教育評価機構の評価基準に基づいた自己点検評価書を作成するためには多大な時間と労力が必要であり、自己点検評価書を作成すること自体が各評価単位の作業目標となってしまう、本来の自己点検評価活動がおろそかとなるような状況が見られました。

そこで本学では、令和 5(2023) 年度に実施された評価機構による認証評価の受審を区切りとし、日本高等教育評価機構の評価基準を用いた自己点検評価ではなく、これまでも作成してきた内部質保障工程表を発展させた形式での自己点検評価に切り替えることとしました。具体的には、各評価単位の当該年度の取り組みをPDCAサイクルに基づき記述し、当該年度の目標、実施状況、評価、改善点の整理に重点を置いた自己点検評価に改めました。自己点検評価書のフォーマットにつきましては、名古屋短期大学の自己点検評価報告書を参考にさせていただきましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

新しい形式では自己点検評価が各評価単位で作成されることとなり、各評価単位間の連携が不十分になるという課題がありますが、大学評価委員会並びに同作業部会が全体を統括することによって連携不足を補ってまいりたいと考えます。本報告書は令和6(2024)年度末に実施した各評価単位での取り組みを総括したものであり、各評価単位の長を中心に全ての教職員に支えられた成果となっています。来る令和8(2026)年度は外部評価を受ける年となり、本年度に作成した簡易版をより詳細にした自己点検評価書を作成、製本する必要があります。各評価単位におかれましては次年度に向けた準備を滞りなくお進めいただくよう祈念いたします。

最後になりましたが、本自己点検評価書の作成にあたり、ご尽力いただきました関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

令和7(2025)年 5月  
大学評価委員会 柏倉秀克